
現実的なRPG。

秋月霞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現実的なRPG。

【Nコード】

N0356BA

【作者名】

秋月霞

【あらすじ】

一般的な高校生の勇橋礫が自称天使から《RPGシステム》なる物を持ち、それを使って剣を探したりドラゴンぶった切ったり異世界にとばされたり、色々やっていく…話。主人公は度胸が無かったりするけど結果的に最強だったりします。まあ文章力が足りて無いのでそうは感じられません…。(練習作だったりします)

1. プロローグです。(前書き)

はじめまして。秋月霞です。

初心者の書いた文章力に欠ける話ですが、楽しんでいただけたら幸いです。

ていうか誰かが読んで下さるのを祈ります……。

1. プロローグです。

目が覚めた。

眠気を払うように瞼をこすって大きく伸びをして、次に枕元に置いてある眼鏡を…。

「…んあ？」

眼鏡が無かった。

というか枕すらなかった。

今更ながらにここが自分の部屋じゃないと気づいた俺

はやばしれき
勇橋礫

は、眠いのと眼鏡が無いのとで物凄くぼやける視界で周囲を見回してみた。

とりあえず目に付くものは……あれま、真っ白だ。

壁とか天井とかそういうレベルの白じゃなくて、海に潜って「海が青いなあ」って思うくらいに白しか見えない。あ、この例えは伝わりにくいかな。

……にしてもおかしいなあ、なんでこんな所にいるんだ？

普通に生活して、普通に自分の部屋で寝たっていうのに。

とりあえず右手を顎に添えて、考える人のポーズをとって目を瞑って考えてみた。

えーと？寝て目が覚めて周りが真っ白。ついでに何にも無いし自分の部屋な訳が無い。そもそもこの白さは科学的にはば無理だろうな。そう考えると…。

「……………ああ、そか。至極単純にあれか。夢か。」

だよな。ここまで周囲が真っ白ってというのは夢以外じゃあり得ないもんなあ。

…となると、王道というかテンプレというか定石セオリーでは、俺が目覚めた時点で何か起こってるのが普通なんだけど……。

なにも起こりそうに無いしなあ、寝ようかな。

実は夢の中で寝るっていうのはさ、夢の中で頬をつねってみるっていうのと同じくらいやってみたかったんだよね。

ひとまず横になろうとずっと閉じていた目を開けて……何か見えたとような気がしたが、気にせず再び目を閉じると横になった。布団も毛布も何も無くて寒々しいが、別段寒くも無いので問題ないだろう。さて、長年の夢だった夢の中の睡眠を

「明らかに気づいているのに寝ないで下さいよ」

さっきまで誰もいなかったところから女性の声が出た。

目を開けたときに見えたのは気のせいじゃなかったらしい。

仕方なく体を起こし、眼鏡が無いので目を細くして（若干睨んで）人影を見ると、明らかにそこら辺にいそうな格好の女性がいた。見間違いではなければ背中が羽が見えたとし頭の上に黄色い輪っかが見えた。

「えーと？どのようなご用件でしょうか」

さっき自分の出した結論なら、ここは夢の中、すなわち自分の脳内な訳であるから……。

「あ、もしかして俺の想像が生み出した幻的なヤツ？うわっ、俺こんなのがタイプなの？初めて知った」

よもや羽が生えている人がタイプだったなんて…。

「いいえ。違いますけど？私は見ての通り天使です。礫さんにお願
いがあるって夢の中に来させていただきました」

目の前の自称天使は、優しそうな表情でそう言い放った。

けどなあ、ごく普通の格好をしている天使なんて信用できないね。
例えるなら美術館の警備員がジャージみたいなものだ。

「信じ難い。大体、天使なんて物が存在する訳無いだろ！そう簡単
にだまされると思うなよ！」

俺が自称天使に疑いの目（とは言っても眼鏡が無いので先ほどま
でと変わらず睨んでいるだけだが）を向けてそう返すと、自称天使
は肩を竦めながら答えた。

「そう言われても、仮にでも信じてもらわないと話が進まないんで
すけど」

「別に話が進まなくてもいいんだけど」

俺はそう返した。

だって何のメリットも無いし。

「そうすると礫さんは永久に目覚めないことになります」

「ちょっと待てーい、横暴だろっ！」

酷くね？だったら俺に選択肢無いじゃん。

「それほど私はお願いを聞いてもらいたいんです」

「はあ…OK。で？何のお願いでしょうか？」

別にピントが合わなくてもいいだろうと思い、ずっと細めていた目から力を抜いた。

ぼやけた視界の中で、自称天使が笑ったのが見えた気がする。

「ありがとうございます。ですがお願いは後回しにして、礫さんに力を付けていただこうと思います」

「え？俺に出来ることだから俺に頼みに来たんじゃないの？」

それだったら俺じゃなくても平気だよな？

「まあ、それもそうなんですけど、礫さんはある一つの能力を持っているので頼みに来たんですが、それ以外はこれっきしなので

」

ある一つの能力？

「はいちょっと待った。ある一つの能力って何？特技的なものって言ったら本の背表紙を見て値段を当てるっていうどうでもいいのしかないんだけど……」

ガチで特技はそんなもんしか無いです。

「もちろんそんなものではありません。……えーとそれも追々説明するのでとりあえず最後まで聞いてください」

「はい。すみませんでした」

自称天使の機嫌の傾きを察知した俺は、誠意を表すために正座をした。

「はい。で、力を付けるために今日から筋トレをしても年単位かかってしまうので、素晴らしいシステムを用いて短期間で礫さんに強くなってもらいます」

初っ端から酷いな。相手が頼んできてるのに鍛える言われたよ。

「で？素晴らしいシステムって何？サプリメント？」

「サプリメントなんか使わせるんだったら筋トレさせたほうがまだマシです」

自称天使はやれやれといった様子で俺のボケをいなした。腹立つわあ。

「まあ、習うより慣れると言いますし、目がさめてから御自分で何とかしてください。ヒントとしては、四角い平面の物を3回叩いてみるといいかもしれません」

突拍子もない自称天使の説明(?)は、とても酷かった。

「具体的に教えるよ！何？何なの素晴らしいシステムって！」

結果的にシステムをくれたって事しか説明されてねえし。

「ま、四角い平面の物、例えばノートとか机とかを3回トントンとすれば分かりますから」

そういつと自称天使は思いつきり礫の首筋に手刀を繰り出した。

「ぐはっ…、そいですか……」

あれ？痛み感じるじゃん夢じゃないじゃん、とか考えながら俺は
気絶した。

2・朝ですよ。

目が覚めた。

目を開けると、見覚えのあるアニメのポスターが（裸眼なのでくつきりとは見えないが）見える…気がする。

ふう…よかった。自分の部屋だ。

結果的にあれ、夢じゃないっぽいしね。記憶も確かすぎるし何より…。

「首痛えし…」

左手で首筋を押さえながら思わず呟いた。
物凄く痛い。　　ありや絶対夢じゃないね。

「さーてと、起きるかねえ…」

部屋には一人しかいないのにそう宣言してから（独り言が癖なんだよ！）、体を勢いよく起こして体を伸ばす。でもって枕元に置いてある（今度はちゃんとあった）眼鏡を取り、軽く眼鏡拭きで拭いてからかけた。

あー、世界がくつきり見える。

続いてこれまた大事な物。

猫のストラップが無理やり付けられた懐中時計を首から提げた。

今日は五月九日、ごく普通に高校の登校日だ。

さて、今更ながらに自己紹介をしよう。

名前は知つての通り勇橋礫、髪形は普通より若干長く肩にかかるかな？つて位の普通の黒髪、前髪長し。でもって黒縁の眼鏡。

背は若干高くて175ちよいで体重は48。体重の軽さには評判がある。

んな体系やら髪形やらで、私服でいると女子に間違えられることがある。それが悩み。

運動神経は中の下もしくは下の上、五段階評価的には1か2。それくらい運動は苦手だ。でもって頭のほうは若干自信はあるが、それでも中の上から上の中だ。

特技は前に述べたように本当にこれといった事は出来ない。体が柔らかいわけでもなければ何か習い事をしているというわけでもない。一応料理はできるが嗜み程度だ。

そんな何の特徴もない俺は中学時代まで過ごしていた田舎を出て親戚というか父の妹が大家をやっているアパートに住ませてもらっている。まあ、簡単に言えば両親が他界したからだ。

ちなみに、高校生の俺が一人暮らしが出来るのは叔母さんがアパートを経営していたという偶然と、叔母さんがいい人だったという偶然が重なって、出世払いという結果が生まれたおかげ。

生活費は両親の貯金やら何やらを切り崩しながら何とかやっているし、高校も引越してきたので渋々私立に入ったがその分のお金もきつちりある。

バイトをする気は今のところは全くをもってありやしない。

敷いていた布団を押入れに片付けてから、制服に着替える。

でもって脱いだ服は部屋の隅にたたんで置いておいて、日曜にまとめてコインランドリーだ。

次に朝ごはんとはんと弁当を作る。

まあ、朝ごはんはごはん味噌汁卵焼きの三つだけで、弁当のおかずもほぼ昨晚の残り。あまり美味しそうとは言えない。

高校生の一人暮らしだし、仕方ないよな、うん。

フライパンで厚焼き玉子を作りながら一人で頷いていると、滅多にならないインターホンが久々に鳴った。

なんとまあ珍しい。

「え？あ、はい少々お待ちをー」

慌ててガスを止めてから、鍵を開けてドアを開けると、俺の叔母さん（40後半）が居た。

「あれ？叔母さん。おはようございませぬ」

「叔母さんはやめると言ってるでしょうが！」

時刻は6時11分、『おばさん』という言葉に年齢を感じずにはいられない叔母さんから、腹に膝蹴りを喰らいました……。

「相変わらず花がない食卓だねえ、全く」

余計なお世話だったの。とか思っけど、腹がまだ痛むので口に出さないでおこう。

「で、朝から何の用ですか？7時には家を出たいんですけど」

晩御飯用に多く作っておいたご飯と味噌汁、それから卵をも一つプラスして作った厚焼き玉子を出して、叔母さん…もとい梅さんと朝ごはんを食べていた。

「いやねえ、昨日の夜礫が出かけたから何の用事だったのかなあと」
ほう…やはりか。ありゃ夢じゃなかった訳だ。あの似非天使め。

「ああ、単に寝付けなかったんで散歩してただけですよ。迷惑かけてすみません」

卵を口に運びながら嘘をつく。

あ、今日の厚焼き玉子はちと醤油が多かったかな？

「なんだ、そんなことか。寝付けないなんて今日なんかあるのかい」
「？」

梅さんが皿の上に残っていた厚焼き玉子をまとめて持っていった。
くそっ…。

「いえいえ全く。昼寝しすぎただけですよ」

これは嘘じゃないよー、昨日はガチで昼寝してました。雨降ってたし。

残っていた厚焼き卵を梅さんに持っていかれたので、軽く梅さんを睨みながら口にご飯を含んで味噌汁を飲む。

「ふうん……ほいご馳走様」

梅さんが食器を流し台に持っていく。

俺は味噌汁だけでご飯を腹の中へ片付けると、同じく食器を流し台へ持っていった。

「あ、食器くらい洗うんで大丈夫ですよ。それより自分の部屋に戻ってくださいよ」

洗おうとしていた梅さんを止めて扉のほうへ追いやる。

「はいはい。じゃあね」

意外や意外、梅さんがあっさりと出て行ってくれたので、俺は食器をさっさと洗ってしまおうと腕をまくった。

が、叔母さんは扉をちょこつと開けて

「あ、そうそうあの厚焼き玉子、醤油がちよっと多すぎて若干辛かったよー」

文句を残して行った。

「全部食べておいて文句言うとは何事だっ!」

俺は人の料理にケチをつける梅さんを怒鳴ったが、隣の部屋からうるさいと怒鳴られた。

畜生……。

「すいませーん」

一応謝っとくけどさ、仕方ないんだよ。

朝っぱらから人にご飯を作ってあげたっていうのに、文句を言われたんだよ？イメージとしては、道に迷った人に地図をプレゼントしたら「この地図汚いです」とかいわれた感じだよ？全く。

2・朝ですよ。(後書き)

あと数話で本題に入ります。(たぶん…。)

3・登校時間です。

「よし、誰もいない」

いつも通り始業より大分早く学校に来た俺は、誰もいないことを確認してそう言った。

毎日こうして早く来て、誰かが話す声を聞きながら寝るのが日課だ。

……別に悲しい奴とかそういうわけじゃないから。友達いるから。ちゃんと。ただ携帯を持っていないっていう残念な理由があって、友達とかと連絡が取れないだけだから…。

まあ、そんなことはどうでもいいんだよ。

「あの自称天使ならぬ似非天使が言った、『素晴らしいシステム』とやらを説明しなくては…」

俺はとりあえず鞆を机の脇にかけ、席に着く。

えーと……、ヒントは『四角い平面の物を3回叩いてみる』だったか。

四角い平面の物……机とか？まあ、例えば机って言ってたしな。

そう考えて、机に左手で頬杖をついたまま右手の人差し指で机をトントンとした。

「うわっ」

三回目のトンで机の表面が青白く光り、何かの画面が表示された。

「……RPG System?」

「画面の真ん中にはそう書いてある。」

そして右上にはパソコンでよく見られる×、下にはパソコンのタブのようなものが七つあり、左から「ステータス」「スキル」「アイテム」「クエスト」「フレンド」「称号」「ヘルプ」とある。

しかし、クエストとフレンドと称号というタブはグレーになっていて、現代人の俺には使えないタブだと十分に分かる。

試しにステータスというタブを押してみる。

「名前：勇橋 礒 《ハヤバシ レキ》

職業：学生 称号：設定無し 状態：取得経験値

量増加：システム適応中」

なんだ？状態システム適応中って。

まあいいかと次にスキルを押してみると、「・戦闘スキル群・生活スキル群・学業スキル群」と三つの項目が出た。

きつと分類しないといけないほど物凄い量のスキルがあるんだろ
うなあ。

「なるほど」

ざっと見てRPGに若干重要だと思われるレベルの表示がないので、オンラインにたまーにある完全スキル制のロールプレイングだろ
う。

「あ？てか学業スキル群って…」

俺はもしかやと思い学業スキル群を開けてみる。

『国語科スキル 1 数学科スキル 1 英語科スキル 1……』

案の定全てスキル化されていて、しかもスキルレベルが全て1……。
義務教育九年間の努力が……あ、でも俺頭の中で計算できるぞ？
うーん……もしや、今の値を1とした場合の数値なのだろうか。だとしたら大分偏りとかが見られると思うんだけど……。

そう思っていると、なんだかイヤホンを付けているかのような近距離から、自転車の鈴の音のような音がした。

「ん？何？」

あわてて耳元を探るが何も無い。つてそりゃそうだ、音楽プレーヤーなんて買う金あったら別のもんに使うつての。
不思議に思いながらも手元に目線を戻すと、スキル値が変わっていた。

『国語科スキル 5 4 数学科スキル 6 8 英語科スキル 4 3……』

あり？めっさ上がつとる。なんで？

しかも俺が苦手な英語だけ丁度数値低いし、若干得意な数学高いし。

軽く考えて、さっきまではオール1だった数値が、俺の能力に適応したってことかな？

面白そうなので戦闘スキル群も見てみるが……ほぼ均一で1。運良く刀剣スキルのみ13だったが、それは中高の体育の選択科目に行われた剣道のおかげだろう。

「あ、さっきのシステム適応中ってやつか」

便利だなあ……。

「でもこっから鍛えろって言ったもんなあ…面倒だなあ……」

机に浮かび上がっている画面を見ながら嘆いた。あの似非天使め…。

大体、スキルが多すぎて何を鍛えりゃいいか分からんし、《魔法スキル・火系統》とかってどうやって鍛えるんだよ。ライターでもカチカチしてりゃあいいのか？

「ていう俺も鍛えようとしてるってのは、不思議なだけだなあ…」

眼鏡を中指で押し上げながらそう呟いていると、ガラガラ…と扉が開いた。

しくじった。時計見てなかった！

「あれ？勇橋、今日は起きてる」

入ってきたのは、いつも同じ時間に登校してくる律儀な友人、朝あさ森命もりみことだ。髪形はまさしく野球少年というべき坊主（偏見）だが、野球部ではなく茶道部なよく分からん奴。

「……お、おはよう」

そう言いながら、俺はポケットから懐中時計をだして時間を確認する。

……うん、やっぱり七時四十分だ。

「おっはよう！珍しいな、起きてるなんて」

朝森はそう言いながら自分の机の上に鞆を置くと、こちらに近寄ってきた。目線は俺の懐中時計に釘付けだ。いや、懐中時計についている猫のストラップだろう。

「昨晚寝すぎたから寝れないんだよ」

俺は肩を竦めてみせて、懐中時計を胸ポケットにしまおうとしたのだが、

「あーちよつと待った、それ見せて」

案の定そう言われたので、仕方なく首から懐中時計を外して朝森に渡した。

「え？まあいいけど…」

「あんがと」

朝森はストラップをじっくりと眺めたり懐中時計の装飾を見たりしている。

そこでふと気づいた。

机に表示されている画面には気づいていないのか？

「こんな可愛げがある手作りみたいな物をつけてるとは、彼女持ちだったのか!？」

ああ、気づいてないな。

という事は、見えてないんだな。よしOKご都合主義。

「彼女なんていねえよ。それは故郷の幼馴染からもらった物」

「なるほど。あんがと、結構綺麗な懐中時計だな」
「そりゃどうも」

そりゃ綺麗だろうよ、父さん自作の特注品だし。

朝森から返してもらった懐中時計を首から提げ、時計を胸ポケットにしまつてから俺はさりげなく机の右上をトイツと触り、画面を閉じた。

我ながらなんとさりげない。

「というか、朝森が懐中時計に興味を示すつても、シニールだな」

俺は懐中時計を眺めていた朝森を見て、思った事を率直に述べてみた。

「何を言う！こつ見えて小物とか好きなんだぜ？俺」

「え！キモっ…とか思っけど口に出さないでおこつ…」

危ない危ない。本音が出るところだった…。

「思いつきり言ってるよ。………そういや、そろそろ部活とかの大会近いみたいだけど、勇橋は部活には入ってないのか？」

ああ、そんな季節かあ…。

「いや？俺はどこにも入って無いよ。インテリ派だから運動は苦手だし、特にこれといって惹きつけられる文化部も無かったしね」

そう言つと、朝森は意外そうな表情をした。

「へえ、部活入って無いのか。この高校、部活が物凄い多いから皆

何だかんだ言って部活に入ってるんだよな。たぶん部活に入っていないなんてのは勇橋くらいだと思うぜ？」

「そんなにか？高校生なんだから、バイト優先する奴もいると思うんだけど」

「まあ、そうなんだけどな？うちの学校、部活数が物凄くて一種のリンゲルマン効果で一つ一つの部活の活動量がすくないから、バイトやってる人でも普通に入れるんだよ」

「は？リンゲルマン効果？」

「おい、馬鹿がなれない難しい単語使くと、逆に馬鹿に見られるぞ」「馬鹿言うな！ちなみに俺はたった五人しかいない茶道部員なんだ」

「いや知ってるよ。」

「とか思ったが、さすがに良心が痛むのでスルー。」

「茶道か…ふあああ…あ…茶道ってやはり和服？」

「やっぱり眠いので欠伸。」

「もちろん。茶菓子も出るし本格的だぜ？」

「そうか…、やっぱり眠いからねるわ」

「あ、やっぱり寝るのか。おやすー」

「おやすみー」

スキル説明は家に帰ってからで良いか。

3・登校時間です。(後書き)

学校での無意味会話も入ってグダグダだけど頑張ります。

4・色々説明します。(上)

「という訳で、ヘルプを使ってみよう!」

とりあえず今日の学業を済ませ、バイトも部活も無い俺は友人達の会話をさりげなく振り切って、全力で帰ってきた。

まあ、全力でチャリを漕いだおかげでテンションが若干上がった故の宣言だったが……。

「おい!うるさいぞ!」

お隣さんから苦情を頂いた。

「すいません!」

「ふう……」

制服を脱いで愛用の真っ黒ジャージを着込んでいるうちに、段々とテンションが下がってきた。

よし。それじゃあ、画面を何処に開こうかなあ……、普通に机でいっか。

俺は机をトントントン、と触り画面を展開させて真っ先にヘルプを押した。

「大体、魔法系統のスキルをどう上げろってんだよ……」

何だかんだ言ってやっぱり気になったので、授業中やら休み時間
の間にノートや眼鏡のレンズなどに画面を展開させて、ずっとスキ
ル欄に目を通していたのだが、やはり気になったのが、『戦闘スキ
ル群』だった。

そもそもあの似非天使に「力を付けろ」と言われていたので、こ
の『戦闘スキル群』を上げれば良いのだろうとは思っていたのだが、
先ほど挙げた『魔法系統』のスキル達や、『幻術スキル』などの明
らか誰かに最初の一步を教えてもらわないと鍛えられないようなス
キルをあげたい場合、どのように上げればいいのか全くをもって分
からなかった。

ちなみに、昼休みに友人の朝森と軽いどつき合いをしていたら、
また例の鈴の音がして、『格闘スキル』が二になっていた。

そういう所から考えて、きっとそれっぽい事をしていれば、スキ
ルは上がるんだろうと思う。

なのでヘルプ画面でその辺の項目を捜そうとしたのだが……。

『ヘルプ 質問事項を打ち込んで下さい。』

「なんとという簡略化！」

下半分がキーボードになっているので、きっとメインシステムか
なんかに繋がっていて、そっちでここに打ち込んだ質問の答えを打
ち込むという、ちょっととしたメールみたいなシステムだろう。

相手はもしかああの似非天使なのだろうか。

「まあ、いいや。じゃあ……最初は『魔法系統スキル』のレベルの
上げ方でいいか……」

キーボードに触るなんて、故郷を出た時以来だ。
そんな訳で若干懐かしみながらキーボードを叩き、エンターキー
を押す。

すると、画面に打ち込んだ文字が消え、『回答中……回答中……』
と表示された。

「あ、やっぱり向こうで答えてるんだ」

なんかサポートセンターとかあったら面白いな。あ、でもこのシ
ステムってあの似非天使とかの自主開発？それともどっかの会社開
発……な訳無いよな。

あ、答えが返ってきた。

『魔法系統のスキルは、今のところ使えません。いずれ、使える所
に行ったときに鍛えてもらうので、今のところは上げられる物を上
げておいて下さい』

使える所に行ったときって、どう考えても地球じゃ使えないぜ？
でもまあ、使えないならいいか。とりあえずそれらは放置してお
いて。

『というか、このスキルとやらを使って何をするんでしょうか？目
的によつて、鍛えるスキルが変わってくると思うんですが』

まあ、どう考えてもこの平和な国日本では使わないような物ばっ
かりなんだよな。

それにさっきの使える所に行ったとき。っていう言葉的にも、考
えられる事はある。

たぶん。異世界。

『確かにそうでした。最初に説明しておけばよかったですね、すいません。今日の深夜24時にまた会いに行きますので、待っていてください。』

「結果的に二度手間じゃねえかよ!！」

今日一日の時間を返せよ!

とかまあ、色々思うがそれは置いていて。

「一から十から百から千まで、聞かせてもらおうじゃないの」

俺は何だかそのまま待つのも癪なので、少々危ないが台所の包丁を22時まで素振りして(こんなので剣とか刀を使うのが上手くなるってのはしっくりこない)『刀剣スキル』が35になったのを確認し、寝た。

はっ、しまった。寝過ぎした。

俺は慌てて飛び起きて、辺りを見渡した。するとやはり、あたりは真っ白だった。残念な事に、また眼鏡が無かった。

「使えねえな似非天使の野郎……」

「え?えせてんしって私の事ですか?」

「!?!?」

思わず口に出してしまっただのにも驚いたが、その言葉に返事があつたのにも驚いた。

「ははは、あだ名みたいなものですよ。ハハハ…」

我ながら乾いた笑いだと思った。

……じゃなくてだな。

「とりあえず、似非天使殿。一から十から百から千まで教えてもらいますよ?」

俺はそう言いながら、作っておいた質問用紙をポケットから取り出した。

フッフッフ……何を聞きたいか分からなくなりそうなので作っておいたのさ。

「分かりました。とりあえず、何から聞きたいですか?」

「んじゃあ、面倒だからこれに書いてあるヤツを説明していつて」

質問用紙に書いてある質問は全部で五つ。

一つ目、『何を頼みたいのか』

二つ目、『何故俺なのか』

三つ目、『それを頼む似非天使は何者なのか』

四つ目、『ここは何処なのか』

五つ目、『RPG Systemは誰が作り、どういう仕組みなのか』

一番聞きたいのは一つ目だ。

「なるほど。分かりやすくまとめて来ましたね。まあ、予測していたので私も答えを用意してますから、楽なんですけどね」
「まあ、じっくりとお願いします」

という訳で、似非天使の講義スタートだ。

「ではまず、礫さんに頼みたい事は」

似非天使は何も無いところから、薄いノートを8冊取り出した。

……いやいや、手品ですか。そうですか。

「この『異世界旅行記』に封じられていた物、剣やら鎧やら宝石やらを回収してきてもらいたいです」

そう言って似非天使は一冊のノート（表紙には『異世界旅行記1』とペンで書かれている）を掲げ中をぺらぺらとめくって見せた。

所々のページに見開きで地図のようなものが書かれていたり、1ページ使って絵が書いてあるのが見えたが、それ以外はほとんどが文字だった。

「この異世界旅行記はその名の通り、私の主が異世界を渡り歩き、その世界の事を書き記したノートで、要は日記帳みたいなものです。それで、この全8冊の旅行記で丁度24個もの世界について書かれていて、主はその24の世界の物を異世界の魔法やらなんやらを使って、記念品としてこの本に封じていました。とりあえずここまではいいですか？」

えーっと。

物凄いファンタジーだね、うん。

まあ、ひとまず仮定としてその話を信じるとして。

「1つだけ。その、似非天使の主って人はどうやって異世界を渡ったって言うのさ？」

そこが重要だ。ノートに物を封じ込めるのを異世界の魔法を使っている。っていうのは理解できる。でも、世界を渡るっていうのはいまひとつ理解できない。

ていうか、なんで主あるじ? あなた召使ですか。

「私の主は、個人的な能力として『世界渡り』を持っていたので、その力を使って世界を渡っていました」

でたよ異能。若干厨二病入ってね？

「それですね。主は24の世界を渡り、いろいろな事をして精神的にも肉体的にも疲れたので、世界渡りをやめて、この私に異世界旅行記を管理させてから、この世界で長い生涯を終えました。それで、ここからが本題なんです。主が異世界旅行記を私に託して暫くたってから、この異世界旅行記に物を封じていた術式の力が衰え始めて、今から1年ほど前について封印がとけてしまいました」

なるほど。信じ難いファンタジーな話だなー。

にしても1年前か……やけに前だな。

「どうして、1年経ってから俺に頼みに来たんだ？」

「最初の8ヶ月程の間は、私1人で何とかしよう頑張っていたんですが、あまりに厳しいと分かったので、それから昨日になるまで、私の主と同じような何か能力を持った人を探していて、ようやく見つけたので昨日、頼んだんです」

ふーん。

「OK、じゃあさっきの話の続きをお願いします」

「はい。それですね。封印がとけてしまう時まで、ただその場に出てきてしまうだけだと考えていたので、何も対策を取っていません。封印がとけると同時に全ての物やら生き物が思い思いに吹っ飛んでいってしまったんです」

「それで、俺に探し物をを手伝って欲しいと」

「そういうことです」

完全にパシリじゃんそれ。手伝う義理無いよね。

4・色々説明します。(上)(後書き)

ぐだぐだですが、あと2〜3話で本題入ります。きっと。

5・色々説明します。(下)

「それって、俺が手伝う義理ってどうか……俺が手伝わないといけない理由ってあるの？一応、この間了承してるからやるにはやるけど」

さすがに俺も一度了承した事を破棄するほど人間捨てちゃあいないよ。

けど、理由も無しに能力持つてるからって（未だに自分が能力を持っているとは思わないが）他人のミスの尻拭いというか、赤の他人の事件の後始末を手伝いたくは無いな。

「理由……ですか……」

これは意外な質問だったのか、さっきまで饒舌だった似非天使が言葉を濁らせて、俺が昨日とったような『考える人のポーズ』（右手で左手の肘を掴み、左手は顎にセットするポーズ）をとって考えている。

そつえば上野の考える人の像って、大分溶けて左手をくわえてる様にしか見えないよね。ってそんな事はどうでもいいんだが。

俺が頭の中で脱線していると、天使がポーズを解いた。

「考えられる理由としては、礫さんが住んでいる辺りにもいくつか『物』があるようなので、それが発見されると礫さんの日常が壊れたり、酷い場合だとその『物』がドラゴンったりするので、礫さん自身にも被害があります。なので、それを阻止できる力を礫さんは持っているので、それを阻止できるならした方がいいかと……」

「どうでしょうか。ご理解いただけましたか？」

「なる。そうか。異世界の物って言ったら、大抵危険な物とかだろっし言い方的にもそういう物なんだろうから、回収を手伝えるなら手伝ったほうがいいのか……。」

「OK、理解した。とりあえず協力する」

「俺は意外と優しいのさ（笑）」

「ありがとうございます。じゃあ次ですね。えーっと2つ目の質問ですが、礫さんに頼んだのは礫さんが主と同じ能力者だからです。ついでに3つ目の質問にも答えますが、私は主に作られた精霊のような物なので、魔法やらなんやら色々使えます。その力の一つで『能力者』を捜す力もあつたのでそれを使って礫さんを見つけて、礫さんに頼んだという訳です」

「へえー、納得納得。似非天使はやっぱり天使じゃなかったか。でもやっぱり少し納得いかない。」

「だから、俺能力なんて一度も使った事無いっての」

「そういう厨二めいた物なんて持ってないって。持ってたら今頃ラノベ的展開で、少女助けたり悪の組織ぶっ潰したりしてるって。」

「あ、でも今のこの状況もラノベ的展開か……。」

「礫さんは能力持ってますよ？この私が保証します」

「ほぼ初対面の人に保障されてもしょうがないんだけど……。」

「でもさ、使えないなら意味無いじゃん」

飛べない豚がただの豚なら、力が使えない能力者なんてただの人だ！

「大丈夫です。そこらへんも《RPG system》で解決しますから」

「ふーん。まあ、そこら辺の事はあとで聞くから残りの質問お願いします」

「了解です」

ここまでできてようやく似非天使が座った。

「さて、4つ目ですが。ここはもうご存知かと思いますが、夢の中じゃありません」

そりゃそうだ。

「ただ、現実存在する所でもなくて、ここはとある山奥の廃村の地下にあつた主の基地的な所に、嚴重に秘匿やらなんやらの魔法をかけた場所です。まあ、対異世界旅行記用の秘密基地だとも思っ下さい。今は私が礫さんが寝てる時に転移魔法を使って連れてきていますが、礫さんにも転移魔法が使えるようになるでしょうから、じきに自分でも来れるようになりますよ」

へえー！！

秘密基地か、すごいね。

「あ、でも秘匿やら何やらの魔法がかかってたなら、旅行記から飛び出していった奴らも壁に当たって外に出られなかつたはずじゃな

いんですか？」

へイ矛盾！

「残念ながら内側からの被害は考えてませんでした。旅行記から飛び出していった物たちは一箇所に穴を開けて、まとめて出て行きました……。でももう穴は塞いで、内側からも魔法やら何やらをしてありますから、万全です」

あれ？というかまとめて吹っ飛んでいったんなら、海外とかにも飛んで行った！？」

「な、なあ。あと物があるのって俺の住んでる辺りと……どこら辺ですか？」

「あ、海外とか、この基地から遠いところから回収したんで、礫さんが住んでる辺りに3〜4個と、あとこれは後でいうつもりだったんですが……その、この異世界旅行記の内側にも飛んで行ってしまつて……」

「内側？」

ノートの内側に飛んで行ったら、ノート爆発しね？

「要は、旅行記の別の世界……とは言っても1巻から8巻のそれぞれの巻に存在する世界の、一番広い世界に入っつてしまつて……」
「つまり、俺は8つの世界に行つて回収してこないといけないと」
「そういうことです」

うっわ。面倒！ てか『物』達、頭いいなオイ。

「でも俺、似非天使の主みたいな異世界渡りの能力を持つてる訳じ

やないだろ?」

いや自分の能力分からんけどさ、皆が皆同じ能力ってことは無いだろ。

「そこらへんも大丈夫です。ちゃんと主が異世界渡りの魔法も研究してそれぞれの世界のページの地図に、その魔法がかかってますから」

なるほど、スーパーマ オ64のステージの入り口みたいな絵に飛び込んだら異世界なんですね。

「ああ、大丈夫なんだ。…でもさ?それ聞いて思ったんだけどさ?」
「はい?」

「絶対その魔法のせいで、『物』がその世界入って行ったよね」

その魔法さえ無ければ、その『物』たちは異世界なんか飛べなかつたはずだろ。

そう思って指摘したら、似非天使の表情が凍りついた。

「そ…そ、そうですね……。はあ……」

あからさまに落ち込んでいるが、まだ聞きたい事はあるので慰める事にする。

「ま、まあ、誰だって失敗はあるさ。似非天使の主はそれが大きかつただけだろ?気にすんなって」

「はあ…そうでしょうか……」

「とりあえず、終わった事はしょうがないし、最後の質問お願いします」

これ以上慰めるのも面倒だし。

「はい……。えーっと《RPG System》は主が研究していた魔法やら何やらの知識を私が継ぎ、開発した人生チートシステムみたいなものです。仕組みは色々な魔法を組み合わせて、ついでに化学も融合させてるので、作った私にもよく分かりません」

おい。どーゆーこっちャそりゃ。

「とまあ、質問に対する答えは以上ですが、これ以上質問はありますか?」

うーん……………。

「じゃあ、質問というかこの《RPG System》に対するクレームというか、ダメ出しというか改善して欲しい所んだけど、改良できる?」

「あ、はい。できますよ」

よし。じゃあこの《RPG System》を俺好みに改良するかね。

5・色々説明します。(下)(後書き)

とりあえず、説明終了。

ようやく次回から本題入ります。

ここまで読んでくれた皆さん。見捨てないで下さい！

6 ゲーム開始だね。(前書き)

ようやく本題入ります！

6・ゲーム開始だね。

はあ……。疲れた。
全然寝てないし。

とりあえず大きく伸びをして、眼鏡をかけてから懐中時計を付ける。

昨日、あれから色々とりふれシステムを改良していたら、気が付けば朝5時になっていて、慌てて似非天使に気絶させられ（もう事情知ってるから気絶させなくてよくな？）今に至る。

なんだか、布団を畳んだら料理するのも面倒になったので、俺は制服に着替えながら通学靴に入っている財布の中身を確認し、「今日は昼飯をコンビニのおにぎりで済ませるだけで良いか」と言い訳をして、机の上に画面を広げる事にした。

《RPG system Ver.2》

改良の末、《RPG system》は名称を《RPG system Ver.2》に変え、色々な機能が変わった。

まず、ステータス画面の情報量が少なすぎるのでスキル画面と合併。名称はステータスで上半分に

『名前：勇橋 礫 《ハヤバシ レキ》

職業：学生

称号：設定無し

状態：取得経験値

量増加』

と表示され、した半分にスキル画面が表示されるようになった。

（実際はステータス1に対しスキル2の比率で表示される。）

またスキルに関しても改良した。

まず、あんなにたくさんスキルがあつたら、今何が鍛えられたのかよく分からなくなるので、使うのにも鍛えるのにも最大8個まで入るスキルスロットに入れなさいといけないようにした。これは、昔MMORPGをやったときの記憶を元に施した改良だ。

そして、さすがにこれは無いだろうということで、『学業スキル群』を丸々削除した。

改良した点はこれだけだが、似非天使から《RPG System》に関して色々説明を聞いた。

『アイテム』画面は、異世界に存在する『空間魔法』というのを組み込んだシステムで、MMORPGのようにどんなものでも収納できる。いわばド えもんのアレだ。

『クエスト』画面は、似非天使が探知した『物』の場所・数・形状などがこれまたMMORPGのクエストのように送られてくる画面だ。

『称号』画面は、その名の通り称号を管理する画面で、称号というのは厨二病の二つ名みたいな物の事で、なんか偉業を成し遂げたりすると《RPG System》がそれを称号として、ステータスに反映するらしい。なんでも、俺の能力とやらもこの画面で管理できるらしい。

そして『フレンド』画面。これが一番使用頻度が少ないんじゃないかと考えている画面で、今後俺以外にも能力者がいて、似非天使が協力を要請して《RPG System》を渡した場合に、この画面で交信ができるらしい。

いや、世界捜してようやく俺を見つけたんなら、そう簡単に能力

者なんて居ないだろとか思ったが、なんでも近くにいらしい。今度コンタクトを取ってくるようだ。

そんな訳で《RPG System Ver. 2》のタブ7つが6つ、『ステータス』『アイテム』『クエスト』『フレンド』『称号』『ヘルプ』になり、その内『フレンド』を除く5つが使えるようになった。

「という訳だが、スキルスロット。何を選択しようか」

昨日改良してる時に、ついなので機能が被っているスキルをまとめたり、レベルの上げ方を調べたのだが、やはり選ぶとなると悩む。

戦闘時の立ち回りや身体能力は、使用中の『武器スキル系』のレベルによって左右するという。

ちなみに『戦闘スキル群』内のスキルはざっと20以上はあった。

「まあ『刀剣スキル』『格闘スキル』『軽業スキル』に『生活スキル群』の『乗用機操縦スキル』は決めただよ。決めただけど、あと4つ…」

『刀剣スキル』『格闘スキル』は言うまでもない。

『軽業スキル』はあれだ。綱渡りとか空中3回転とかサーカスみたいな動きができるアレだ。戦闘中にあれできたら便利だろうなっって感じで入りたい。でもって『乗用機操縦スキル』はなんと便利な事か。自転車から飛行機まで、このスキル1つで乗り物全てを操縦できるらしい。

それで、問題のあと4つだが魔法を入れるかどうするかを悩んでいる。

似非天使によれば、『魔法スキル系』は一度魔法が存在する世界に行つて、魔力を感じてみないと使えないらしい。

なのでスロットに入れていても鍛えられる事は無い。

「なら異世界に行くまで、色々な『武器スキル系』を試してみるかなあ」

結果的に『刀剣スキル』『格闘スキル』『槍・棒スキル』『斧・鎌スキル』『弓・銃スキル』『ナイフスキル』『軽業スキル』『乗用機操縦スキル』の8つに決まった。

そして時刻は8時25分

俺は走っていた。

「はあ…はあ…しま、った…今日、学校だった…！」

スキルを決めて、スキル値を上げるための小道具（割り箸鉄砲とかペーパーナイフとか）を搜したり作ったりでのほほんとしていて、気が付けば時刻は8時。

焦って全力で自転車をこいだいせいか、『乗用機操縦スキル』のレベルが上がったらしい。今何かは知らないが。

まあ、とにかく間に合つてよかった。

そう思いながら教室に入り、「あ、今日は休みかと思つたぜ」とか言ってくる朝森に「久々に寝坊しちゃつてさ」と返し、自分の席

に崩れ落ちた。

「はぁ…遅刻するかと思った……」

皆勤賞狙ってるのに。危ない危ない。

さて。

今週はスキルを上げまくって、クエスト開始に備えよう。

そう考えながら、眼鏡のレンズに画面を展開し、クエスト画面を開く

『クエスト』

・ 『妖刀を取りに行け』

・ 『宝玉の奪取』

・ 『オリハルコンの探索』

・ 『ドラゴンの捕獲もしくは消去』

以上全4件』

ドラゴンの捕獲もしくは、消去？討伐じゃなくて？

ああ、この世界に居ちゃいけないからか。

「じゃあ頑張るかなー！」

俺は机に伏せながら小声で気合を入れた。

7・クエスト開始します。

『受注クエスト』

《妖刀を取りに行け》 クリア条件・妖刀『パンドラ』の回収。

クリア報酬…回収した妖刀

妖刀の所在地…柳葉市地下水道のどこか』

『受注クエスト』

《ドラゴンの捕獲もしくは消去》 クリア条件・緑地竜の捕獲、もしくは痕跡の消去。

クリア報酬…日本円5000。

緑地竜の所在地…柳葉市地下水道のどこか』

とまあ、クエストを受けてみた訳だが…。

「なんで2つとも場所同じ!?!」

これじゃあ最悪の場合、竜に睨まれながら刀拾ってそいつで切りかかるしか無いじゃんか!

宝石は「奪取」って書いてあるからどうせもう誰かに拾われちゃってるんだろうなあ…とか分かるし、オリハルコンなんて「探索」だから!もう面倒ってあっさり分かっちゃうから妖刀とドラゴンにしたってのに。

まあ、まとまってるならまとまってるで楽なんだけどな!

「その2つは出身の世界が一緒なので同じところに逃げてるんだと

「思いますよ？出身が同じということは、魔力も同じ波長というか同じ感じなので共感を感じ、一緒に飛んで行ったかと」
「なるほど。そういうことですか」

俺が心の中で怒鳴っていたら似非天使が答えてくれた。

さて。

今俺が居るのは例の基地とやらで、クエストに関して質問というか暇つぶしに秘密基地に連れて行ってもらった。

ちなみに日付は5月16日月曜日で、似非天使とのファーストコタクトからぴったり1週間だ。

遅刻しかけた日から、俺は授業中ペーパーナイフで紙を細かくしたり家で包丁を振りまくったり、朝森と腕相撲したりどつきあったりで、スキル値がそれはもうみるみる上昇し、『刀剣スキル』は70後半、

その他スキルは60位まで行って、あれ？もう完全習得コンプリートしちゃうんじゃないかね？とか舐めてたら、今日の朝ステータスの状態異常《取得経験値増加》が無くなっていて、スキルを上げるのが物凄く面倒になってしまった…。

なんでも、あの状態異常はシステム取得から一週間限定で、取得経験値の量が3倍になっていたらしい（赤いやつかよ）。

ああーあ、他のスキルもあらかた上げておけばよかった…。

「とにかく似非天使さ、俺のこのスキルで何とかなんの？相手は竜だろ？」

「大丈夫ですって。竜は竜でも異世界旅行記内で最低ランクの竜ですから。強い奴はもっと遠くに逃げますから。それに、もう1人の鈴さんに手伝ってもらったらいいじゃないですか。」

そう。あれから似非天使は、捜していた能力者とコンタクトを取っていて、先週の木曜に同業者が増えたらしい。
らしいのだが…。

「まだ一度もコンタクト取った事無いし、何処に居るかも知らん」

残念ながら顔も知らないし、名前も似非天使が言っている下の名前の鈴すずしか分からない。

「えー、鈴さんは良い人ですよ？しかも礫さんと同じ高校の2年生ですよ？それですね、能力は《代弁者》って言って無機物やら植物などの、自分では意識を伝えられない者と会話ができて、仲良くなると操れるらしいですよ？」

「へえ、すごいねー」

なんていう厨二設定……。

「そういえば、礫さんの能力は結局どうでした？」

「え？ああ、そついや俺も能力あったんだっけ。えーっと確か《全知全能》って名前で称号にあったよ？使った記憶は全く無いけど」

聞き覚えも無いし使用経験も無い。

「ってか《全知全能》って何！？何でもできるの？何でも知ってるの？人体練成できるの!？」

「まあ、いざとなったらそれを使って竜と戦ったら大丈夫だとおもいますよ？」

「…そうかねえ？というか、スキルを上げたは良いんだけど、得物が無いってのはやっぱり妖刀を先に探したほうが良いかね？」

俺は懐中時計で時刻を調べてから、読んでいた『異世界旅行記1』を閉じて立ち上がった。

そろそろ帰らないと、明日も学校だから遅刻しちゃうよ全く。

「それもそうだと思いますけど、最悪、包丁とか木刀で立ち向かったり、『薬物スキル』上げてから眠らせたりするのでも良いんですよ?」

ああ、そういう手もあったか。

「いや、でも『薬物スキル』は20位までしか上げて無いから、妖刀優先で丸腰でいいや」

「丸腰ですか?さすがにカッターナイフくらいは持つておかないと、下水道はどぶねずみがいっぱいですよ?」

あー確かどぶねずみって肉食なんだっけ。怖い怖い。

「でもまあ、そういうのは『軽業スキル』で何とかなると思っただけど、無理かねえ……」

自分でも驚いたのだが、『軽業スキル』が50超えた辺りからちよつとしたピエロみたいな動きができるようになったのだ。

まあ、まだ空中三回転とかは無理っぽいけど、この間学校でペーパーナイフを素振りしながら歩いていたら、階段で足を滑らせた時に軽く宙返りを決めて着地できた。

ちなみに『軽業スキル』は毎回毎回自転車に乗る前に自転車の上に立ったり、ベランダの柵の上に登って端から端を往復して上げた。はっきりに言ってこのスキルを上げるのが一番辛かった。

「まあ、結構な高さ跳べるのなら大丈夫だと思いますけど、下水道は暗いですから間違えて水の中に落ちないように気を付けて下さいよ?」

「ああ、そうか。懐中電灯がいるのか」

危ない危ない。真っ暗闇の中を手探りで進むところだった。

「まあ、現在地は『クエスト』画面で確認すれば分かりますけど、その辺気を付けて下さいね」

「はいはい。そーいえば、似非天使は何をやったんの?」

「え? 私は回収した『物』を再度嚴重に封印しなおしてます」

あ、なるほど。

「そか、ま頑張れー。あ、そろそろ帰らしてもらって良い? 時間的に」

「あ、はい了解しました」

よし。じゃあ、明日の放課後でも立ち向かってみようかなー。

7・クエスト開始します。(後書き)

名前：勇橋 礫 《ハヤバシ レキ》

職業：学生

称号：設定無し

状態：異常無し

スキル

『刀剣スキル』：76 『格闘スキル』：67 『槍・棒スキル』

：58

『弓・銃スキル』：62 『ナイフスキル』：69 『軽業スキ

ル』：56

『応急処置スキル』：23 『乗用機操縦スキル』：72

8 下水道は関わらないほうがいいんだよ。

正直、予想外でした。

いやー、うん。もっとあっさり行けるもんだと思ってました。舐めてました。ごめんなさい。

「誠心誠意謝るんで、許してください」

その日、俺は下水道で。

「本当にすいませんでした。通してください」

どぶねずみの目らしき光の群れに土下座していた。

いや、いくらどぶねずみでも、誠心誠意謝れば通してもらえるかなーって。

いや、だって、いまいるのが丁字路の交わってる所の上なんだけどさ、三方位ねずみに囲まれてんだもん。さすがにこの量は予想外だよ。

軽業で跳び越えようにも、明かりが右手に握っている懐中電灯だけなので、下手したら道の真ん中を通っている臭い水の中にドボンだ。

「マジどうしろってんですか！あんた達に食われろってんですか！」

さすがにこれ以上は冗談が通用しないかなあと思い立ち上がる俺。すると、俺の足は微かに震えていた。

忘れてた。俺、不安症に上がり症で度胸が無いんだっただ。

「キユー、キユー」

「キユー」

「キユーキユー」

どぶねずみ達は、じわじわ寄って来ている。

いや、やばいなオイ。

「人肉は不味いよ？戦時中食べたとか食べて無いとか噂だけど、美味いっていう噂は聞かないよ？いくらジョーズでサメが食べてたって言うても、どぶねずみさん達の舌には合わないと思うよ？」

「キユーキユーキユー」

あ、やべ。後ろの奴らまで動き出した。

交渉は通じないのか？そうなのか？

自分でも分かる。

俺は今かなりてんぱってる。

「畜生、深呼吸、深呼吸……んでもって、何かスキル…何かアイテム……」

俺はようやくやく少し落ち着いて眼鏡のレンズに画面を展開して、打開策を練る。

「えーっと、アイテムアイテム……ってある訳ねえだろ！おにぎりくらいしかねえよ！」

とかいいつつアイテムからおにぎりを取り出し（眼鏡から取り出し）前後の群れに放る。

これで少し余命が延びた。

ってあれ？左の奴ら、睨んでくるだけだな。

「あ、こいつら泳げないのか？」

それなら助かる可能性が無いことも無い。

とか思ってたらドボンドボン音を立てながら、どぶねずみ達が水に飛び込んできた。

「ああーやべえ、来る来る！来てる来てる！ああ、もう！死ぬより臭くなるほうがマシだ！」

俺は覚悟を決め、左前方に向かって跳ぶ。

「南無三つー！」

無意識に目を瞑って跳ぶ。

そして足が地面を捉えたら、一瞬だけ目を開けて今度は右前方に跳ぶ。

再び足が地面に着地したのを感じ、目を開けて懐中電灯で足元を確かめる。

「よし、安全確認！」

「キューキューキュー！」

後ろからどぶねずみ達の怒り（だと思つ）の鳴き声！

「のわー！ダッシュダッーシュー！！！」

「キューー!!」

俺はもうなりふり構わず、足の赴くままにダッシュする。
右、左、右、左、左、右……。

「キューキューー!」

左、左、右、左……。

そして気が付けば後ろにねずみの声は無く、暗い下水道に俺のゼーゼー言う声だけが響いた。

「はぁ……はぁ……はぁ……ふう……とりあえず助かったー。」

はぁ。俺生涯16年で終えるのかと思っちゃったよ

「さて。妖刀君、出ておいでー」

とりあえず生命の危機は脱したので、目標を探して歩き出す。
帰るのには、水の流れの逆に走っていけばいいのだが、妖刀とドラゴンがどこにいるのかが分からないから、まだ大分帰れなさそうだ。この辺にいればいいんだけど……。

でもまあ右手に懐中電灯もあるし『アイテム』の中に食料もあるから、若干余裕はある。明日は学校なので時間的には余裕は無いが。

「妖刀ってムラマサみたいなヤツだよな。イメージとしてはこつこつ……黒い刀から紫色のヤバイオーラが出てる感じなんだけど……。俺触れるかな……」

あ、曲がり角。 よしじゃあここは右で。

「ドラゴンはなあ…、名前からして一介の学生が立ち向かうような相手じゃないと思うんだよな」

名前が緑地竜だから、たぶんファンタジー的な『地』属性だろうと考えると、相当硬いんだろうと思う。

ってか硬さが売りだと思っただよ。勘と直感と雰囲気。イメージ的には、緑色のトカゲが猛突進してくる感じ。

「もしそうだとしたら、勝ち目無いよな…」

俺が使える得物が刀と素手しかないからなあ…。狙うなら口の中とか眼球とか。

あ、また曲がり角。ここは左で。

「はあ…どこぞのゲームみたいな爆弾が欲しいっての……む？」

いま懐中電灯の灯りに何か反射したぞ？もしかして第一関門突破かな？

もう一度そこを懐中電灯で確認すると、そこには真っ黒い刀のような物が刺さっていた。

「よしよし、刀ゲット」

と、俺が早足で光ったものの所に向かおうとした時。

「…シュー…シュー…シュー…」

なんだか蛇の息のような音がしたと思ったので、刀が刺さっている所に向けていた懐中電灯の灯りを少し上に向けてみる。

「え？いや、ちょっと待とう？な？」

まあ、予想通りというか想像のままの、緑色の甲殻に覆われたトカゲがいた。

「シュー……………シュー」

あ、やべ、若干足が震えてきた。

今の内に、ゆっくり逃げておこう…。

ばれてないばれてない。見つかってない見つかって…………。

「……………シュー……………」

あ、やべ。目合った。

ヤツは思いつきり体勢を低くして…。

「……………シャアアアア！！……………」

飛び掛ってきた。

8 ・下水道は関わらないほうがいいんだよ。(後書き)

なんか、ぐだぐだな文章になってしまいました……トホホ……。

9 はじめましてです。

とりあえず、震える体を叱咤して跳んでくるトカゲをしゃがんでやり過ごす。

「キシヤアアア!!!」

トカゲは奇声を発しながら俺の頭上を跳び越えて行って、地面に激突した。

そりゃもう、大砲が撃ち込まれたみたいに地面に激突した。

「ギヤアアア!!!」

あ、顔から血出てる。これ以外と勝てんじゃね？

俺は余裕を感じて、トカゲが地面に突き刺さってる隙に刀に向かって跳ぶ。(いやだって水路の向こう側だし)

ところがどっこい。背後からものすごい気配。

「シヤアアア!!!」

瞬間的にトカゲが跳び込んで来るのを理解した俺は、直感で跳んでくるトカゲの頭を足で捕らえて……思いっきり蹴る!

イメージとしては『自転車で走りながら、同じく走行中のめっさ早い車を右手で掴み、自分の自転車を加速する』みたいな感じ。

そんな感じに跳んでくるトカゲの勢いで加速した俺は、通りすぎそうになった刀を慌てて左手で掴み、刀もろともそのまま前方へ吹っ飛ぶ。

「それでもって『軽業スキル』で華麗に着地！」

「なあって！想像以上に速かった…！」

大分奥へ吹っ飛んだ俺は、振り向いて懐中電灯を向けて、地面に激突しているトカゲを確認する。

「あの速度に真っ向から突っ込んでって、刀突き出せば向こうの速度で十分致命傷になると思うんだけどなあ」

右手に握った妖刀の手触りを確かめつつ、覚悟を決める。

…とまあ、格好良く言ってみるも、体が緊張というか恐怖で思うように動かない。

「シャー…！」

懐中電灯を左手に持ち替え、右手に刀。

微かに震えつつも、体を横に向けて腰を落とし、刀を突き出すように構える。

大方、フェンシングの構えのようなものだ。

「よし来い…トカゲ…！」

あ、そういえばこの刀『妖』って付いてるけど、俺使って平気なのか？

「キシヤアアアア…！」

右手の刀に不安を感じていると、その隙を狙ったようにトカゲが突っ込んで来た。

「ぬおっやべ！」

慌てて体に力を込めて… タイミングを狙って、突く！

「チエストオオオ！！」

体が強張っていたが、その辺『刀剣スキル』のフォローで何とかなり、右手の妖刀がトカゲの眉間に吸い込まれるように 刺さったような手ごたえを感じて、俺は吹っ飛んだ。

でもって不運にも後頭部をぶつけて、意識はフェードアウト…。

「……痛っ！」

わき腹に痛みを感じて跳ね起きる。

「ってここ何処！？」

辺りは真っ暗で何も見えない。

ふと左手に何か握っているのを感じ、手探りでそれを探り当てる。

「えーっと？あ、懐中電灯か。あ、でも光るとこ割れてる」

ああ、思い出してきた。

トカゲに刀突っ込んだんだよな。あ、それであれから吹っ飛んで

…。

「あ、後頭部！」

血とか出てんじゃないね？平気か？

とそこまで来てようやく俺は、頭に違和感があるのを感じた。
恐る恐る触つてみると、布の感触。

「あ、包帯？でも誰が？」

「……私、だけど……」

「なーつとー！」

全く気配を感じなかったところ（とか言ってみるも、もちろん俺
に気配を感じる力なんて無い）から声が聞こえてきて、びっくりきょうてんき吃驚仰天驚
ようてんどうぢき天動地。

あ、たぶん四字熟語の使い方間違えた。

「えー！？ちよ、だ…誰？」

声のした方へ問いかけると、その謎の人物が光を向けてきた。
うわっ眩しい……。

目を慣らすこと数秒、じわじわとその人が見えてきた。

容姿は俺と同じくらいの身長・体型、服装が見覚えのある服……
というか俺と同じ高校の制服。顔は黒髪黒目（ってそりゃそうだ）
に女子にしては短い髪形（ショートだっけ？）で、個人的9段階評
価で8くらいの美人（というか可愛い系）。

「……どなたですか？」

女子なのにも驚いたが（何でこんな所にいるんだよ）同じ学校の

生徒というのにも驚いた。

「……その制服……同じ」

相手は俺を指差して言う。

ってそうか。俺も制服着てたんだっけ。

「えーっと、柳葉高校普通科1年6組、勇橋礫です…えーっと、先輩？」

「…普通科2年4組、たみやま笹宮鈴」

笹宮…鈴、鈴……鈴……ああ！この人が！

「えーっと鈴先輩つてもしかして、えーっと《RPG System》持ってます？」

「！…うん。まあ…あなたがあの精霊さんが言ってたもう一人？」

ああ、やっぱりこの人だったか。
そうかそうか。

「ええ、そうです。助けくれてありがとうございます。あ、あのトカゲ…じゃなくて眉間に刀が刺さったドラゴン、どうなりました？」

「…ドラゴン？」

「えーっと、俺そいつに吹き飛ばされたはずなんですけど…」

鈴先輩は何のことか分からないと言いたいような表情で、首を傾げている。

あ、若干可愛い…じゃなくて。

「見てませんか？ あのクエストのドラゴンの事なんですけど」
「…一応、私も探しに来てただけど…見てない。…けど、刀？
ならそこに…」
「え？そこ？」

鈴先輩が指差した所を見ると、確かにあの妖刀が転がっていた。
不思議に思い拾って見てみると、あのトカゲのらしき血がびっしり付いていた。

無論、刃こぼれは全く無い。

「あれ？あのトカゲに刺さったはずなんだけど…こいつ自分で抜けて来たのかな？」

俺はとりあえず刀が確保できた安堵で、そんな冗談を口にした。

『さすがは主よく分かりましたね』

とまあ、答えが返ってくるとは思わなかった。

「え？は？今鈴先輩しゃべりました？」

「…いや、その刀から聞こえたけど……」

あ、やっぱり？

「えーっと？なんだっけ、あー『パンドラ』だっけ？君がしゃべったの？」

『はい。初めまして。私妖刀パンドラと申します。』

「…なんでしゃべれるの？」

気になったのか、鈴先輩も刀に尋ねた。

『私は意思を持つ刀、故に妖刀と呼ばれたのであります。ちなみに、先ほど…といつても1時間ほど前ですが、礫さんに拾われた時はまだ力が足りなかったので会話できませんでしたが、例の緑地竜の血を吸って、力が手にはいったので礫さんの元に飛んできた次第でございます。』

なるほど。血を吸う上に意思を持つ刀、妖刀ねえ…。
ところで。

「あの竜はどうした？」

『はい。呻きながら逃げて行きました。』

……意思があつて俺のところ飛んで来れるなら、ついでに倒して来いよ！

10・とりあえず撤退しようか。

「…全く。意思があるなら倒しておいてくれたら楽だったのに…」
『申し訳ありません。我が主』

俺は、トカゲを普通に逃がしたこの妖刀を叱るだけ叱ると、再び鈴先輩に向き直った。

「すみません鈴先輩、ちょっと灯りこつち向けてもらっていいですか？」
「…いいよ」

鈴先輩が灯りをこつちに向けてくれたので、俺は胸ポケットから懐中時計を取り出して、時間を確認する。

ちなみに家を出たのが23時、下水道に潜入したのが24時（この間の1時間は、似非天使と話したりしていた）そして今の時刻が大体3時30分。

「3時半か…。俺が気絶してたのが1時間らしいから…帰るのには2時間半かかる…。下水道の入り口から高校まで大体20分…2時間余裕があるか…。鈴先輩はどうします？」
「……竜の場所は一応分かるけど、私はまだちょっと捕まえられないし、戦うのも得意じゃないから、勇橋君が体調直してから一緒に出直した方がいいと思う…」

あ、そうだった。俺頭怪我してるんだった。
と頭を触ると、今度はわき腹がズキンと痛んだ。

「あれ？わき腹も？」

そついや、わき腹の痛みで目覚めたんだっけ。思い出しながらわき腹を触ると、制服に若干穴があいていてそこには包帯は無かったが、乾いた血のような感触があった。

鈴先輩はこの傷には気づかなかったのか…。

「ん？てか鈴先輩竜の居場所分かるんですか？」
「…うん。この壁たちが、教えてくれるから…」

ああ、そついやそついう『能力』持ちでしたっけ。

「なるほど。じゃあ、今日はもう帰りますかね」

俺はそう言って、眼鏡のレンズに画面を展開。『アイテム』画面を開いて

「じゃあパンドラ、ここに入ってる」
『なんですと！？』

パンドラをしまった。

「あ、鈴先輩のほうがり道正確に分かります？俺、この水の流れと逆に歩いていけばいいとか考えてたんですけど。」

「…案内する。ついてきて」
「あ、はい。ありがとうございます」

俺は若干痛むわき腹を押さえながら、すたすた歩いていく鈴先輩についていった。

ん？そついえばどうしてわき腹怪我したんだ？

そんなこんなで、現在時刻8時ジャスト。

下水道から案外簡単に出てこれたので、下水道の出口で鈴先輩と別れて一度帰宅し、破れた制服を脱いでもう一着の制服に着替えてから、軽めの朝食をとって、登校した。

「で？なんで俺の席に君がいるんだい？朝森君」

「いや、だってまた遅いから？今日こそは休みかなーと」

「んな訳あるか。そこどけ」

なぜか俺の机でだらけていた朝森を鞆で叩いて追い払ってから、俺は机に伏せて寝た。

いや、だって眠いし。昨日寝て無いし。

「なー勇橋ー、その包帯どうしたんだー？」

あ、しまった。包帯つけたまんまだった。

「いや、昨日帰りに転んだだけだから」

「え？大丈夫か？」

「ハハハ、平気平気」

「でも後頭部真っ赤だぜ？」

「え？マジ？」

慌てて手で後頭部を探ると、もう固まってはいるが結構な広範囲

で血が付着していた。

「げ、やばっ」

「気づいてなかったのかよ」

「知らなかった」

とりあえず席を立ち、廊下の水道へ向かおうとしたのだが…

「な！お前、左足真っ赤…いや真っ茶じゃねえかよ！」

「は？左足？」

見ると、わき腹から流れた血が、ズボンの左側を真っ茶に染めていた。

完全に考えてなかった。

「……あーもう面倒だな。いいか」

とりあえず後頭部を洗っておこう。

「ていうかそんなに流血しててよく立つてられるな、お前」

「んー、確かにそうだな。よく生きてるな俺」

『応急処置スキル』が血を補充したのかな？何で傷口にかさぶたができないんだろうと思ってたけど、血液の補充をしたからか。

『応急処置スキル』セットしといて良かった！。

とか考えながら後頭部を水でじゃばじゃば洗う。

「うおっ、勇橋の血で流しが真っ赤に！」

「おっと、それはすまない。責任は朝森命にツケといてくれ」

「責任をツケるってなんだよ」

後頭部を洗ってから（数人の同級生に変な目で見られた…）再び包帯を巻いておいた。

「左足は…いいかな。面倒だし」

「いやいや、意外と鉄臭いんだよ。血液って鉄分ばつからだからさー」

「お前：血液にFeが含まれている事を知ってるのか。予想以上だ」「酷いなー勇橋君」

「え？だって、あの有名な朝森のことだから、てつきり理科の知識なんて『昆虫は足が6本』ってくらいしか知らないもんかと…」

「あの有名な朝森って、どの朝森だ！ってかどんだけ無知だと思われてたんだよ！」

「でも実際そんなもんだろ？」

「ちやうわ！」

「…あのー、勇橋君？ちよつといい？」

左足の処理を諦め、朝森と軽く漫才をしながら席へ戻ろうとしたが、名前も知らない女子に呼び止められた。

「ん？いいけど？何か用？」

全く見覚えがない女子なんだが…：あ、鉄臭いって苦情かなんか言いに来たのかな。

「えーっと、笹宮先輩が呼んでましたよ？あつちの階段の所で」

「え？あ、そう。ありがとう」

それだけ俺に伝えると、女子は自分の席に座った。

にしても、なんか用事かねえ…：《RPG System》の『フレンド』画面で連絡取れるのに。

「え？いやいや、勇橋君。笹宮先輩ってあの笹宮先輩？」
「あのとてなんだよ、あのとて」

なんだか妙に食いついてくるな。

「いやいや、あの笹宮先輩を知らない！？あの『沈黙の姫』と呼ばれる笹宮先輩を！？」

いや、キモイから。

なんだよ『沈黙の姫』って意味分からんよ。

「なにその二つ名、厨二病めいてて気持ち悪いんだけど」

「そう言うなって！我が友よ！実は俺も思ってたんだけど、FCの会長がそう言えって強要してくるからクラブNO.122の俺は逆らえないんだよ！」

「意味分からんから。てかFCって何？サッカーでも始めるのか？」

朝森

「ちげーよ！ファンクラブだよ！ファンクラブ！笹宮鈴ファンクラブ！」

「キモイ。却下。じゃあ俺呼ばれてるみたいだから。また後で」

「NO！！我が友よ！！！」

ファンクラブまであるのか…。さすがラノベの舞台の聖地、私立校。何でもアリだな。

で、えーっと…あ、いた。

「鈴先輩、どうしたんです？呼び出したりして」

階段の所に突っ立っていた鈴先輩に話しかけると、何だか一瞬周

りの男子に睨まれた気がした。

オイオイ、ファンクラブ規模でかいな。

「……左足が痛いことになってるの、気づいてなかったみたいだから……」

そう言って鈴先輩は、紙袋を渡してきた。
中身はどうやら制服のズボンらしかった。

「?どうやって手に入れたんです?」

「私の兄の」

先輩すごいですね。

「ははは、ありがとうございます」

「どういたしまして」

「……はぁ……じゃあ後の事はこっちから連絡しますね」

そう言って、俺は眼鏡のレンズを三回叩いた。

「……分かった。じゃ」

「はいはい。さいならー」

はぁ、先輩いい人だな……。

10・とりあえず撤退しようか。(後書き)

どつやら僕は、意味の無い日常を書くのが好きみたいですな。

11・あれ？俺無双ですか？

いやー、ファンクラブとか、ある意味最強だよな。あの勢いとキモさ。

「なーなー勇橋ー、どうしてお前いつも寝てるのに笹宮先輩と仲いいんだよー」

「仲いいとかいうレベルじゃないだろ。まだ知り合いレベルだつての」

「そーゆーなつて。おれらファンクラブはさ、暗黙のルール『抜け駆けはするな』で話すのもタブーなんだぜ？」

「……そういう所は控えめだよな、ファンクラブつて」

んな馬鹿らしい会話はいいんだよ。とにかく今は睡眠睡眠。

「なーなー、勇橋が俺に教えてくれなかったら、事実を面白おかしく捏造して、おはようからおやすみまでファンクラブにストーリーキングされるようにしちまうぞー」

「……おい、そりゃないだろ。ていうかもう若干ストーリーキングされそうなんだが」

実際、先ほどから挙動不審というか目つきが怪しいというか恐ろしい男子が、結構周りにいたりする。

「教えるよー」

寝ようとする俺に絡んでくる朝森にツッコミを入れながら、どう誤魔化そうか脳をフル回転させる。

無論、事実なんて言う気も無い。

「えーっと、あれ、単純に昨日自転車で転んだ時に笹宮先輩が通りかかったんで、ちょっと手当てしてもらったというか？されたというか…」

「本当か？」

「無論。俺は嘘はつかないのが特徴だから。もし俺が嘘ついたらそれは俺の偽者だから。よろしく」

「なるほど。じゃあ、その言葉自体嘘だからお前は偽者だな！」

「だとしたら嘘付いたら俺は偽者っていう言葉も嘘だから、俺は本物な？」

「……え？あ、そうか…」

「はっはっは、精進したまえよ朝森」

「……朝から元気だな勇橋」

「え？俺、超寝たいんだけど」

俺、あの下水道でトカゲぶっ飛ばしたら、朝森と芸人目指すんだ…。

徹夜明けのテンションで、そんな死亡フラグ(?)を考えてしまった。

そして時刻は21時。

俺は今、似非天使の所に来ていた。

…いや、連れてこられた。

「あ、礫さん。目覚めました？」

「……首筋が痛むけど、目覚めたよ……」

なんか知らんが、家で色々スキルを地道に上げていたら、唐突に似非天使がやってきてきて首筋に……。

「で、何の用？あ、妖刀返す？」

俺はそう言っただけ眼鏡のレンズを叩き、『アイテム』画面を開いた。妖刀のアイコンはただの刀の形をしていた。

「いえいえ、改めて考えてみると、本に封印しなおすより、そのアイテム画面に入れておくほうが断然安全ですから。そこに入れといてください。で、墓の下まで持って行って下さい」

「……ん。一応了解」

「で、今日ここに連れしたのは、なんでも礫さんが昨日緑地竜にぶっ飛ばされたと聞いたので、軽く自分の性能を知っておいたほうがいいんじゃないかと思ひまして……」

なる。

「という訳で、あの妖刀出して下さい。あ、スキルはちゃんと戦闘用にしてくださいよ？」

あ、ああ。そっか、危ない危ない。危うく補助スキルとか生活スキルだけで戦う所だった。

俺は眼鏡のレンズに展開されている画面でスキルを戦闘用に組みなおす。

「よしOK。で、何やんの？」

「あ、はい。ちょっと中堅級モンスターの的なのと連戦トレーニングです」

「…中堅級って、あれ？あの『ボスって言うにはちょっと弱いんだけど、雑魚にしては半端なく強い』みたいな中途半端なヤツ？」

ドラ エのスラ ムタワーとかモン ンのゲ ヨスみたいな。

「そんな感じですよ」

似非天使はそう言って、周囲にあつたもの（異世界旅行記やらペンやら俺の鞆やら）を全てド えもんのポケットの如くしまつていく。

「じゃあ、礫さんは魔法使えないんで、ゴーレム2体と…」

え？ちょっと待って？俺の得物斬撃タイプなんだけど。堅いの苦手なんだけど

「オーク4体、ケンタウロス4体で」

似非天使がそう言うと、似非天使の周りに紫色の魔方陣が、ひい、ふう、みい…10個。

「大丈夫なはずですよ。礫さんは刀剣スキルが70あるんですから。それって、異世界行けば魔王を吹っ飛ばせるレベルですよ？大丈夫ですよきつと」

という少し不安な台詞を残して、似非天使は消えた。

残されたのは、刀一本握った、本来インテリ派の高校生と石の巨人と豚人間と馬人間

「弱いものイジメだろ？これ。戦隊ヒーロー並に数に違いがあるんだけど」

とりあえず軽口を叩いて、震えそうになる体をほぐす。

「…ふう………」

じゃあ、日本人の侍（気取り）らしく、刀を左腰に構えて抜刀のポーズ。

「…よしこい！まずはオークでお願いしますっ！」

俺の言葉が届いたのか届いてないのか、オークとケンタウロスが群れになって俺に襲い掛かってきた。

「ちょっと待とうぜオイ………」

オークの得物は木に石をくりつけたような棍棒？ケンタウロスは槍だ。

つまり、ケンタウロスから片付けたほうがいい…と思う。

「よしOK。とりあえず『軽業スキル』舐めんなよ」

俺は格好つけのポーズを解いて、オークに向かって走る。

オークも獲物が動いたのを見、雄叫びを上げて走ってくる。

「はっはっは、甘い甘い。まだ戦闘歴2日目の俺に言えたことでもないがな！」

そしてオークと俺が衝突しそうになった時に、俺は脚に力を込めて、オークを跳び越えて1回転。ケンタウロスズ（複数形）と向き合う。

『軽業スキル』も大分鍛えているので、オークは結構後ろ。気にする事は無い。

とりあえず俺は心の中でこれからの殺生を天に謝罪してから、右手に握っていた刀を、目の前のケンタウロスに無造作に振るう。

だがまあ、ケンタウロスは戦闘歴2日目の俺と違って一応は戦闘のために生まれた存在。

そんな斬撃軽く避ける　とか思っていたのだが、自分の右手は、ケンタウロスの動体視力を上回りごく普通にケンタウロスの首を一閃…。

「え？嘘お…」

残りのケンタウロスズも一瞬動きを止めた。

え？嘘だろオイ。何、俺無双？

だがそこら辺は戦闘のプロ。

光の粒になって消えていく（召喚モンスターだからか？）仲間を尻目に、ほんの一瞬で我に返ったケンタウロスズが一斉に槍を突き出してくる。

「おわつとー！」

でもって俺はそれを刀で斬り払い、思い切りケンタウロスズの真ん中へ踏み込んでまたまた横一閃。ついでに右側のケンタも斬り捨て、返す刃で左のケンタも一閃。

「とりあえずケンタウロスズのご冥福を…」
「わぎゃあー」

俺が光の粒になって消えていくケンタウロスズに合掌していると、
ようやくおいついたオークズ（複数形）が襲い掛かってきた。

「行けっパンドラっ！」
『なんとっ！』

俺はその飛び掛ってきた礼儀知らずのオークに刀を投擲して返り
討ち。残る三体の内、右側の奴を狙って踏み込む。

「そっいや、俺って『格闘スキル』も上げてたんだよな…」

直感で俺を察知したのか、高速で目の前に現れた俺に右手の棍棒
を振りかぶるが 無論、遅い。

俺はその右手を左手で掴み、左足をそいつの横に踏み込ませて右
足で右方向に払うように足払い。でもって仰向けに転ぶそいつの腹
を、全力で叩き落とす。

「チエストおおおお！！！」

ドゴオオオオン！！とちよつとした爆発級の音を出して、俺の右
手は軽いクレーターを作り出した。

もちろん、豚人間ことオークは木っ端微塵。俺の左手に握られて
いるオークだったモノを含めて、光の粒になって消える。

そして、俺の右手が繰り出した衝撃波で吹っ飛んだオークズも消
える。

「あ、あれ？そんなに強かったかな…？」

はつきり言っただけで自分が一番驚いた…つと、まだいたんだっけ。クレーターの前で佇む俺の視線の先には、未だに出てきた時のポーズのまま動かないゴーレム兄弟がいた。

「さてと。こいつも素手でいけるかな？」

ちなみに刀は、オークに投げたまま帰ってこない…というか、帰ってこようとしたときに衝撃波で吹っ飛んだ。

「よし来い！ゴーレム兄弟！」

「ボオオオオ…」

俺が呼びかけると、ようやく動き出した。

つまり、俺が呼びかけるまで待っててくれた訳か

「なるほど。一応そこは親切設計なんだな」

あ、そういえば、今回は俺震えて無いな。

自分の実力知ったからか？

「まあいいや」

ゴーレムは、2体が左右対称になって同じ動きで俺に向かってきた。俺はそれを睨んで、足に力を込める。

「ボオオオオオ！！」

ゴーレム兄弟は2体揃って拳を振り上げると、俺めがけて振り下

ろす。

そして俺はそれを、全力で回避　　しすぎた。

先ほど俺が叩き出した轟音よりも、少し大きめの轟音を響かせて、ゴーレム兄弟の拳はクレーターを作り出したが、無論そこに俺はおらず、そこから50m程後方にいた。

ちょっと迫ってくる拳に恐怖を感じて、逃げる時に足に込める力を強めすぎた。

「ふう、逃げすぎた逃げすぎた……。よし！じゃあ行くかね！」

再び足に力を込めてダツシュ。

左ゴーレムの拳の目の前でブレーキをかけてその拳に飛び乗り、その腕を伝って頭部めがけてダツシュ。

「よしOKー！」

慌てて左ゴーレムは体を揺らして、俺を振り落とそうとするも、すでに俺はゴーレムの頭部に到達。でもって、全力の回し蹴り！

バゴオオオオン！！と気持ちのいい音を立てて吹っ飛んでいくゴーレムの頭部は、そのまま右ゴーレムの頭部を巻き込んで地面に激突。

光の粒になっていく足場を跳び、横転しているゴーレムに『軽業スキル』の空中1回転を交えてからの踵落としを炸裂させる。

ドゴオオオオン！！とオークの時と同規模のクレーターを作って、ゴーレムが地面にめり込んで消えていった。

「ふう……」

とまあ、俺は汗をふき取る動作を取ってから、眼鏡を中指で押し上げた。

「何？俺こんなに強かったのに、トカゲに吹き飛ばされたの？」

11・あれ？俺無双ですか？（後書き）

ようやくの戦闘描写で、ようやく主人公最強。

というか、話を重ねるごとに主人公の口調が変わって行って…いやいや気のせい。

今日は後1話更新予定。

12・爆死は壮絶だよ。

「という訳で、礫さん。ご自分の実力。分かりました？」

クレーターの前で、あのトカゲへの殺意を実らせていると、ふつと湧いて出たように似非天使が現れた。

「ああ、ばつちり分かった。でもこんな実力、学校で朝森とどつき合っている時とか発揮して無いぜ？」

というかしたら怖い。

「それはそうですよ。礫さん本人が戦闘と認識しなければ、戦闘スキルの力は発揮されないように設定してありますから」

「そりゃよかった……」

しかし、あの時俺は戦闘だと認識していたのに吹っ飛ばされた。つまりそれは、俺が回避すれば避けられたし、刀を刺突に使わないうで、連れ違いざまに斬っていれば平気だったという訳だ。

「畜生……あのトカゲ野郎め……」

「トカゲ？ああ、あの緑地竜のことですか？」

「そうだけど」

あ、今何時？

胸ポケットから時計を出して確認……21時20分。

「ああー、まだ時間あるねえ……」

「時間？誰かと約束でもあるんですか？珍しい」

「あつて1週間程度の奴が知ったような口を利くなよ！凶星なんだから傷つくだろ！」

「あ、凶星なんですか。で？誰とです？」

「誰って、あんた保護者かよ…まあ鈴先輩とあのトカゲぶっ飛ばしに行くだけだよ」

今日の授業中、暇なんでノートに画面を展開させて『フレンド』画面でずっと会話チャットしていた。その中で色々知ったのだが、鈴先輩の能力（厨二っぽい気にならない！）の『代弁者』は例えるなら、コンクリの壁や木材の机、その辺の草花や地面の砂粒達と会話ができ、仲良くなれば形状を操れたりするらしい。

ちなみに、犬や猫などは鳴いたり吠えたりで意思を伝えられるので会話できないらしい。

…それって境界線微妙だよな……。

あ、さっきの戦いの時に『全知全能』使えばよかったなあ…

「え？鈴さんと会ったんですか！それは良かったです！鈴さん、戦闘スキルはあまり上げる気は無いって仰ってたんで、礫さんといコンビになるかと…」

「ああ、そういえば戦闘スキルを上げるのは普通すぎて面白く無いって言ってたな」

俺もその辺共感できるので、今『薬学スキル』や『幻術スキル』『闘スキル』などを鍛えている。

「そうですね。まあ、あと残ってるのは緑地竜の抹殺と紅宝玉の奪還ですから。頑張ってください」

「ん？オリハルコンは？」

「鈴さんがあっさり見つけてきてくれました」

ああ、能力的に探すの得意そうだなあ...

「そか。じゃあ今度はゴブリンかなんか100体くらい出してよ。

あ、あとここも真つ暗にできる？」

「はい。できますよ？」

とりあえず時間的に余裕がありそうなので、暇つぶしもかねて暗闇での戦闘練習を始めた。

ついでに『暗視スキル』も上げておこう...

はい。時刻は24時。場所は柳葉市下水道。

潜入してから1時間経ってるんだけど、まだまだ遠くにいるらし

い。(鈴先輩談)

「あとどれ位かかりそうですか？」

「...今ようやく半分くらい」

「了解です」

いやー、助っ人がいて良かった。

楽ちゃん楽ちゃん

「...そういえば、精霊さんが腕試しやるって言ってたけど、どうだった？」

「ああ、ゴーレム2体とケンタウロス4体オーク4体ゴブリン20

0体を、倒せましたよ。意外とこの《RPG System》チート級に強いです」

「…ふーん、1番上げてるのってどれ位？」

「『刀剣スキル』で、79ですかね」

「もうすぐ80なんだ…私は『索敵スキル』と『解析スキル』が揃って70…」

さて。時間が余っているので、ここで皆さんにスキル解説！

まず、『索敵スキル』

このスキルは、その名のイメージ通り、敵を探知してその数・場所が分かるスキルで、分かりやすく言うと潜水艦のソナーみたいな物で、レベルを上げ方はたぶん気配を察知したり、隠れてる奴を探したりしたらいいと思う。つまりかくれんぼが最適だ。

でもって『解析スキル』

これはその物（草花や動物・人間等）を見て、その物の名称や特徴が分かるスキル。レベルの上げ方はちよつと特殊で、実際に見てその物の特徴や名称を性格に思い出さないといけない。

ただしレベルが40くらいになると、名称は勝手に思い出せて知らないものでも分かるようになる。

とまあ、レベルを上げるのが面倒なスキルばかりだ。

この二つのスキルは『戦闘スキル群』の『補助スキル系』に所属する。

「…そういえば、礫君ってスキル補正で身体能力高いよね？」

「ん？あ、はい。結構高いですけど」

全力でクレーターが作れます。

「…それなら、道教えるから、走って行ったほうが早くない？」

「……確かにそうですね、鈴先輩は？」

「…磯君に連れて行ってもらう？」

「……」

これは？背負うのか？そ、それともお姫様抱っこのアレか？フラグか！？

「…とりあえず、背負ってもらって…」

ですよね…。高速で走るのにお姫様抱っことか、風圧半端無いですもんね。

「…了解です」

俺は手持ちの懐中電灯を、常時レンズに展開中の画面へ投入。そして鈴先輩をおんぶする。

あ、これはこれでいいかも（笑）

あーいやいや違う違う。決してムフフな下心とかじゃなくて！大体鈴先輩は女性のアレ小さいし…って何考えてんだ俺！？

「じゃあ、とりあえず真っ直ぐ」

「…は、はい了解です」

無心無心平常心平常心。

で、足に力を込めて、高速ダッシュ。

「あ、そこ右」

「おーっと、はいここですね」

「うん。あ、つぎ左」

「了解です」

「そこ右」

「はい」

序盤と違い、曲がる回数が多くなってきた。
トカゲが近いのだろうか。

「そこ右、で次は左」

「右…左…あ、いた」

俺の高速ダツシユで約5分。

ターゲットロックオン。

「じゃあ、とりあえず先輩はここにいてもらっていいですか？」

「…ん。分かった」

水路の脇で先輩を降ろして、水を飲んでいる（オイオイそれ下水だぞ？）トカゲを一睨み。

「とつとと終わらせて、今日こそ寝てやる」

今回は自分の実力も分かったし、懐中電灯も鈴先輩がもってるから余裕余裕。

俺は口笛でも吹きそうな勢いで姿勢を正す。

「とりあえず、これからの殺生をお許し下さいな…」

あ、別にこれ宗教とかじゃ無いから。

なんとなく行っておかないと気が治まらないというか…。

「シャアア……？」

あ、見つかった。よし。行くか。

即座に両足に力を込めながら右手にも力を込める。
何たって依頼は『ドラゴンの消去』だからね。

「シャアア！！」

トカゲが吠えるとはほぼ同時に俺はトカゲに向かって跳ぶ。
実際にはほんの一瞬だが、徐々にトカゲの口が近づいているのが
理解できる。

「木っ端微塵ーっ！！」

俺とトカゲが激突しそうになったときに、右手を思い切り、炸裂
させる。

ドゴオオオオオオオン！！

と、物凄い音をたてて、トカゲもといドラゴン（緑地竜）はまさ
しく木っ端微塵の肉片に成り果てて、下水道を流れていった…。

とまあ、下水道という閉鎖的空間内での大爆発トカゲなので、音が物凄
い事になって襲ってくる。下手したら鼓膜破れるんじゃない？

しかし、その辺しっかりと考えて、『異音耐性』というスキルを
つけていたので被害は少ない。

「とりあえず、あの肉片に成り果てたトカゲ…もとい緑地竜よ…安
らかに…」

だって、壮大な爆死だけ？死後くらい安らかに眠れよ…

「じゃあ、帰りますか。鈴先輩」

「その前に、礫君血と肉片、下水に流して行って」

あ、俺真っ赤っかだ。

12・爆死は壮絶だよ。(後書き)

今日はここまで。続きはwebで…じゃなくて明日。

ああ…PVとかはどんどん増えるのに、ポイントが増えない…

やっぱり俺文才無いんですかね…

13・作戦会議です。(前書き)

地球編ラストエピソード…になる予定。

13・作戦会議です。

「あ、おはよう。今日は寝てるんだな」

「……」

「寝てるって悪いんだけど、何でも君のストーキング部隊がどうしても君を見失うっていう報告をしてるらしいんだけど？勇橋ってなんか某国のスパイとか？そういうオチ？」

「……んな訳あるかってーの」

「えー、じゃあ何で見失うのさ。あいつらのストーキングは凄いだぜ？任務のためなら、蚊さえも見失う事は無い精鋭部隊なんだぜ？」

「どんな任務だよ」

「それはさておき、勇橋、ストーキングをまいて何処へ逃げてるって言うのさ」

「はっはっは。私は神出鬼没のまさしく幻。見つけることなどできんさ。はっはっは」

「おっはようございまーっす！あなたが勇橋君ですかー？」

「誰！？」

俺と朝森が早朝漫才を繰り広げ、「あ、今日はちよつとネタのキレが悪いな」とか思っていると、何やら活発そうなポニーテールの美人さんがメモを片手に話しかけてきた……っていつからここに……？

「はい！私、2年3組新聞部の日野美月ヒノミツキっていいですよ！」

「は、はあ……。で、そんな先輩がこんな睡眠少年にどんな御用で？」

朝森は何だが日野先輩を見てぼーっとしている。

一目惚れか？くっくくく、後でからかってやるっ。

「えと、勇橋君があ鈴と仲良くなったと聞いて、鈴の友達として話が聞きたいなーって思ったのとジャーナリズム魂が燃えたから取材に来ました！」

「…？はあ………」

あれ？鈴先輩絡み？だから朝森は放心状態なのか？この人も有名な人なのか？

「で、とりあえず勇橋君、鈴との馴れ初めを…」

「却下。寝ます」

ジャーナリストにまともな奴はいない。って聞いたことがあるな。

(偏見)

「えーちよっと！あ、君は確かFCの会長の弟君だよ？てことは勇橋君のストーキング部隊からの報告聞いた？」

「……！！は、はい知ってますよ？」

声が裏返ってるぜ？朝森君。

「じゃあじゃあとりあえず部室へどうぞ！」

「あ、はい！」

机に伏せている俺の耳に、遠ざかっていく2人の足音が聞こえたので、俺は素直に寝る事にした。

…にしてもあの先輩、いつ現れたんだろうか？

そんな訳で放課後。色々やって再びストーキング部隊をまいて、
似非天使に頼んで基地へ。

『受注クエスト』

《宝玉の奪取》 クリア条件・紅宝玉の回収。

クリア報酬：回収した宝玉

宝玉の所在地：柳葉市日田南201-3839 『浅見』宅』

「えー…完全に人の家じゃないですか……」

「しかも結構有名な、あの浅見さんの家だし……」

「え？浅見さんの家って有名なんですか？」

「無駄に富豪で、物凄く太ってて性格も悪いし態度も悪いおばさん」

「富豪？こんな半分田舎みたいなところですか？」

「田舎だから土地も安くて、家が学校の体育館くらいある」

「んな面倒な……」

「更に常備警備員＋防犯装置（最新鋭）作動中」

「家ごとぶっ飛ばしましょう」

軽く本気で考えた。

でもこの能力、対科学向きじゃ無い気がするんだよねあ…

『ハッキングスキル』とか無いし。

「…家はぶっ飛ばさないけど、軽く形変える」

「ああ、家とコミュニケーション？」

「10分くらいないと、仲良くなれないのが難点……」

「じゃあ、俺が突っ込んで警備員叩きのめしましょうか？」

「……」

「うーん…でもさすがにそんな事をやるうとするとなあ……。やるのが犯罪めいてて怖気付いちゃうな…。」

「やっぱり無しで」

「…あそこは庭にも警報装置があるから、家と話せない……。」

「うーん…警報装置に『幻術スキル』って効きませんか？」

「…ん？」

「最近鍛えてて『幻術スキル』のレベルが50いったんですけど、そのおかげで、分身みたいな出せたり自分の姿を消せたりするんですけど…機械に通用しますかね？」

「…それだったら『隠密スキル』上げて潜入するほうが可能性があると思う…けど」

「うーむ……」

何か無いかなあ…俺『隠密スキル』は37なんだよね…。

「という訳で、似非天使は何か策無いですか？」

「え？私ですか？そうですねー…前にイタリアで似たようなことがあったときは、魔法で姿を消して、わんさかいた警備員を眠らせて取りましたけどね」

「そんな物でなんとかなるんですか…。」

でも魔法使えないから、そこは『幻術スキル』で代用して…。

「やっぱり正面突破でいいんじゃないですか？」

「それは少しまずいと思いますけど…。」

付け焼刃な小技に走るより、自分の実力を最大限に生かせる戦い

のほうが良いに決まってるだろ？

「じゃあ、こうしよう。一応は潜入する。でもって、見つからなければそれでよし。見つければ俺が全力で攪乱・破壊で、鈴先輩がコミュニケーション」

「…というか精霊さんが手伝ってくればそれでいいのでは？」

「え？私、行ったほうがいいですか？」

「…俺ら2人じゃ、まだ魔法も知らないから科学には勝てない」

「……じゃあ、精霊さんも手伝うっていう方針で、作戦会議」

「OK。じゃあ、まず似非天使がまず、宝玉を取ってきて……」

「それができたらやっています。」

はははジョークジョーク…。

「無し無し、今の無し。えーっと…って、ん？できないの？イタリ
アでできたって言ったのに」

「イタリアは軽い博物館のようなところでしたし、警備システムも
しょぼかったですから」

という事は、似非天使でも最新鋭の科学には勝てないのか？

「魔法っていうのは万能じゃないんですよ。いくら姿を消すって言
つても『姿が見えなくなる』だけで『透明になる』訳じゃないんで
す。つまり蝙蝠こうもりの音波には見つかってしまっし、熱源センサーにも
見つかってしまいます」

なーる。

科学ってのは毎日進歩してるもんねー。

「…じゃあ、まず精霊さんが礫君に不可視の魔法をかけて、それで

礫君が『幻術スキル』を展開して潜入。これで大丈夫じゃない？」「
「それもそうですね。俺は顔を見られなければ後は大丈夫なんです
から」

「ああ、そうか。礫さんは顔を見られなければ何とかなるんですか。

「

「……一応は学生だから。警察沙汰にならないければ」

「じゃ、それでOKってことで。」

「……私は留守番」

「面倒なんでさっさと行っちゃいましょう」

いざ行かん。浅見宅へ！

13・作戦会議です。(後書き)

あと2話ほどで地球編閉幕。その後は遂に異世界へ！

感想・批判・誤字脱語があれば遠慮せずどうぞ！

読者様の声が聞きたいです！よろしくお願いします！

14 宝玉奪還…というか窃盗？(前書き)

14・宝玉奪還…というか窃盗？

そして時刻は23時。場所は浅見邸近くの公園。

「じゃあ、不可視の魔法かけますよ？リミットは1時間です」
「了解。余裕っちゃ余裕だけど、宝玉が何処にあるかわからないのが難点だよな」

問題はそこだけだ。

この問題は鈴先輩を呼べばそれで済むのだが、『幻術スキル』の姿くらましは本人のみ有効なので、連れては来れなかった。

「それと、紅宝玉には守護聖獣が宿っていて、宝玉に血を捧げるとその聖獣がその望みを叶えるという…相当ハイリスクノーリターンな宝玉でして……」

「……でも、いくらなんでも使用限界とかあるだろ？それにあの浅見とかいうおばさんが、そんな能力知ってるようには見えないけどね」

「それもそうなんですが、あの聖獣の短所は口に出した望みではなく、本心の望みを勝手に解釈して叶えようとしてしまう所だけです」

ふーん。でもそれもあまり短所には思えないけどな。

「って事は、結構な高級品なのか？紅宝玉」

「ええ、日本円で1兆は下らないかと…」

「……」

「ですがまあ、この世界には魔力が存在しないので、あの宝玉も1回願いを叶えるのが精一杯でしょう」

「…え？じゃあ似非天使はどうやって魔力を蓄えているのさ」
「魔力を作り出す魔道具がありますから」
「うわっ、万能」

つまり、今回の奪還作戦で恐れるのは、『浅見とかいうおばさんが宝玉の力を使う』っていう事だけだし、その効果も1つだけだからさほど恐怖ではない。

「さて、長話も何だし、そろそろ行くか」

「はい。じゃあ頑張ってくださいね」

「OK了解」

そして、似非天使が俺に右手をかざして『不可視』と唱える。
って呪文とか無いのかよ。ツマンネ。

「おお、すげえ、俺透明じゃん」

「透明と言っても、見えなくなっただけですけどね」

「平気平気。さてと『幻術スキル』《陽炎》^{かげろふ}」

そう。実は『刀剣スキル』やらなんやら共通で、スキルそれぞれにも技があるのだ。

例えば今使った《陽炎》これは『幻術スキル』レベル50で手に入った技で（って、技とスキルって同義語だよな…）自分の周囲の空気を歪ませて相手の認識外にする技だ。

他にも『刀剣スキル』で言えば《居合い切り》や《空刃》^{くっは}、『格闘スキル』で言えば《貫通波》や《縮地法》^{しゅくちほう}など、結構ふざけた強さの技がある。

「…どう、俺の存在分かる？」

「え！？あ、はい。もう行ったかと思ってました」

「よし、じゃあ行ってくる」

あーあ、人生16年で法律を破る事になってしまおうとは…。
じゃあ、これからの不法侵入を天に謝罪…しなくていいか。
天に謝るのは殺生の時だけにしておこう。

「…にしても、いくら透明で《陽炎》使っても最新技術の赤外線
に勝てるのか？俺」

浅見邸の門に近づくとつれ、段々と不安になってきた…。

「うーむ、じゃあ、勢いで玄関まで跳んでみるか？」

ああ、やばい。足が震えそう…。

「よ、よし。跳ぼう。一気に跳ぼう」

緊張で何もできなくなる前に侵入してしまおう。
そう決心(?)して、足に力を込める。

「あ、そうだ。スキルスロットを変更しておこう。付け焼刃だけど、
『隠密スキル』もセットして…」

スキル設定完了。

「よし、じゃあひとつ跳びー!!」

俺は足の力を解放して、門を越えて玄関に跳び込む。

跳びながら周囲を確認して警報装置？らしきものを多数目撃し、
反応しないのを見て安心する。

「お？意外といける？」

が、俺はやつぱり緊張していたらしい。

バゴオオオオオオオン！！

と、盛大に音を響かせて、扉に激突してしまった。

全くブレーキの事を考えていなかった。

「げ、やべえ……」

扉は力に耐え切れず、鍵と蝶番を盛大に吹き飛ばして、内側に倒れてしまっている。

「と、とりあえず警報装置も鳴って無いしOKOK……」

俺が倒れこんだ扉を跨いで浅見邸へ侵入すると、今の音を聞きつけたのか執事の格好をしたおじさんを筆頭に、メイドさんや警備員がぞろぞろと湧いて出てくる。

それを見て「うわっ執事とか初めて見た……」とか口に出しそうになったが、さすがに声までは隠し切れないので慌てて口を押さえ、この場を去ろうとしたのだが、学校の昇降口ほどもある豪邸の玄関に警備員やらがぞろぞろいるので通れない。

てかこいつら、この程度の事で仕事ほったらかしているのかよ。

仕方ないので、『軽業スキル』で思い切り跳び越えることにした。

誰ともぶつからないよう、玄関の隅っこで足に力を込めていると、奥から首や指に宝石をジャラジャラつけた『あくらマダム？』みたいなお婆さんがのっしのっし歩いてきた。

「これは一体どういうことなの？説明しなさいっ！」

「あ、浅見様。実は先ほど、物凄い轟音がしたので駆けつけてみれば、扉が壊れて開いていたのです」

「扉に付いた痕跡から考えて、なにかが物凄い速度で突っ込んできたと推測できるのですが…」

そう執事と警備員が説明しているのを聞いて、扉を再び確認すると確かに凹んでいる。

とりあえず、顔面から跳び込まなくて良かった…。

「そう。で？侵入者はいないの？」

「ええ。今防犯カメラなどを調べていますが、侵入者どころかこの扉を吹き飛ばした物さえも見つかっておりません」

「大丈夫なんでしょうね？今夜は儀式を行うと言ったでしょ？」

お？これは紅宝玉の事か？

「は、はあ例の『宝石が血を欲している』という夢の話でしょうか…ですがそんな」

「あの宝石を手に入れてから、毎晩毎晩そういう夢を見るのよ？これはもうやってみるしかないじゃない！」

そう言って浅見さんは立ち去っていった。

よし、あの浅見さんについて行くか。

そこまで話を聞いた俺は、とりあえず『軽業スキル』で人混みを跳び越え、おばさんについて行く。

って、ついていってどうしようか？

おばさんが血をかけようとする前に突撃するか、かけて効果が発動されてから騒ぎの合間を狙って回収するか…まあ、悩むまでも無く前者だろうな。

「あ、ちょっとそこの警備員さん？」

5分ほど歩くと、浅見さんは一つの部屋の前で止まり、近くにいた警備員（一体何人雇ってんだよ）に声をかけた。

「これから少し儀式めいた事するから、何があっても慌てないでちようだいね」

「わ、分かりました…」

そういうと、浅見さんは部屋の中に入っていった…。

そしてガチャッと音を立てて鍵がかかった。

…いやいや！何やってんの俺！

浅見さんが一人分しか扉を開けなかったので、全く入る隙が無かった。

さて、どうしようか。

まず警備員を黙らせて…扉を強引に開けて潜入？

…それでいいか。妙な策は練っている暇が無いし。

ひとまず周りを見回して警備員が他に居ないか確認する。

よしOKこいつだけだ。

いくら透明で《陽炎》使っていようと気配までは絶てない。

なので即行で警備員に近づき、警備員が風の動きに気づく前に、首筋に手刀を繰り出す。

「ぐっ…」

警備員は驚いた表情を残し、気絶した。
フッフッフ、我ながら隠密みたいだな。

ひとまず警備員を壁際に寝かせておいた。

そして俺は扉の前がただの廊下なので、助走無しで扉をぶち壊さなくてはいけない。

「そんな訳だから、『パンドラ』頼むぜ」

俺は眼鏡のレンズの画面から『パンドラ』を取り出す。

『合点承知。任された』

俺は扉の前で構え、『刀剣スキル』《細刀》を発動する。

この技は、細かいものを切断するのにつかう技で、縛られた物を開放する時や、人質を傷つけずに主犯を切る時などにつかえる。

まあ、要は『工業用カッターで折り紙を切る』ような技だ。

その技を使い、俺は扉の鍵のみを破壊すると、中へ突入した。

すると、丁度中ではあの浅見さんが宝石に血をたらすところだったので、俺は慌てて刀を投げようとするが、すぐに間に合わないと感じて直感を感じた。

浅見さんの手から垂れた血は宝玉に付着すると、宝石が吸い取るように消えていった。

「やっぱり、この宝石は血を吸うんだわ！その代わりに何かしてくれるのかしら！」

浅見さんそう言つと、まるでその言葉に応えたかのように宝玉が赤く輝き、中から某ランプの魔人の如く、赤い竜が湧き出てきた。いや、この場合はランプの魔人ではなくドゴンボールの竜のようだ。とでも言っておこう。

『我に血を与えたのは汝か…』

「!?!?…そ、そうよ！」

『そうか…願いを聞こう。力が足りぬが、一つだけ願いをかなえてしんぜよう』

げつやべえ手遅れか！

俺は慌てて宝玉に近寄り、宝玉を回収しようと試みるが、そこに発せられた浅見さんの望みで動きを止めてしまった。

「私は、金・宝石・服！世界全ての富が欲しいわ！」

オイオイ！こいつなんだ？一昔前の典型的なラスボスか!？

『よかるう。ならば我がこの世界のトップをひれ伏せさせよう』

あ、力が足りないから世界の頂点をぶっ倒すというところで落ちて着いた。

「え？私はそんな事…」

『では世界の頂点の首を捧げてやる！しばし待っておれ!』

自分の願いと違う事を言われて慌てている浅見さんを尻目に、赤竜は実体化してから天井を突き破り空へと…ってさすがにこれ以上ミスは重ねないぜ

ひとまず電光石火の早業で浅見さんの首筋に手刀を叩き込み、台座においてある宝玉を『アイテム』に収納…とついでに『パンドラ』を収納。

『我の役目はアレだけかつ！』

ここまで6秒。

そして俺は、すでに体を空へと躍らせている赤竜めがけて、思い切り跳ぶ！

「ちよつと待てえー！！」

『む？何者だ？この竜の精霊に歯向かう者は？』

すると驚いた事に、俺が発動していた不可視の魔法と、『陽炎』が吹き飛んだ。

しかしそんな事は気にせず、空中で『軽業スキル』を発動、体を回転させ、速度を武器に尻尾めがけて回し蹴り！

『ぬおっ！！』

バチイイイイッン！！

と盛大に夜空に音を響かせて、竜の尾っぽが物凄い速度で蹴った方向へ吹き飛ぶ。

もちろん、体も引き連れて吹き飛ぶ。

『ぐわあああ！！！！』

さすがに今回は相手が重いので、クレーターを作るほどの速度は出せなかったが、それでも相当な速度で地面に叩きつけられた竜は、気絶しそうになる意識を保つため顔をブンブン振る。

『な…何奴だ。この私を足蹴にし、ここまでの威力をたたき出すとは…』

何とかそう俺に尋ねてくるが、俺は答えずに間合いを一気に詰める。

「殺生をお許してください！」

軽い調子でそう言って、俺は『格闘スキル』《爆掌破》ばくしゅつぱを放つ。

この技は、手のひらから発せられた衝撃波を、敵の体内で爆発させるという最近覚えた技だ。

名前が厨二臭いのであまり好きではない。

『ぬおおおおー!!』

俺が思い浮かべていた通り、竜の体が内側から爆発した。

『む…無念…』

すると、この竜は召喚された奴だったので、光の粒になって消えていった。

うん。死体を片つける手間が省けてよかった。

14・宝玉奪還…というか窃盗？（後書き）

書くのを急ぎすぎたせいか、展開が早い気がしますね…ごめんなさい。

感想・批判・誤字脱字があれば遠慮せずお願いします！

15・休日は休みたいです。(前書き)

地急編最終話：だけど最終話っぽくは無いです。
どちらかというと、繋ぎの話ですね。

15・休日は休みたいです。

あれから数日が経ったが、俺の目撃情報は全く無い。

だが、あの浅見さんが「全力で捜し出して！」と警察やらなんやらに、金に物を言わせて圧力をかけたそうで、今日も浅見邸周辺では聞き取り調査やらなんやらを行っている。

そうして柳葉市がそんなこんなで慌しい中、俺はドラゴン討伐時の報酬5000円を貰ってウハウハしていた。

「何買おうかなー 何買おうかなー」

一人暮らしを初めてはや2ヶ月程。たった2ヶ月だがその2ヶ月で食費光熱費の合計と両親の遺してくれた遺産+自分の貯金の書かれた通帳を眺めてきたので、お金のありがたみは身に沁みて分かった。

故に自分で稼いだお金は好きに使おうと、柳葉市の大きなショッピングモールへと足を運んでいたのだった。

ちなみに服装は白いTシャツに上着として黒いパーカー（のファスナーが付いてるヤツ）下は普通の布製の長ズボン、色は黒だ。

しかも上着のファスナーを閉めているので全身真っ黒だ。そんな格好で、装備品は肩掛けの鞆only、無論黒。

これでニット帽を被っていたら警察に報告されてしまう格好なのだが、本人は全く気にせずスキップでもしそうな勢いで本屋へと赴いた。

そこで俺は、軽くデートみたいな感じの朝森と……（誰だっけあのポニーテール）に出会った。

「おう！朝森と…どなたでしたっけ？」

「よ、よう、勇橋」

「どうも！日野美月だよ？」

ああ、日野さん。

ていうか2人とも俺と目が合ってから挙動不審なんだけど。

「どうも！お2人はデートですか？」

俺は笑顔でつい聞いてしまった。

ここで脈アリなら2人とも顔を赤らめて「ち。ちげえよ！」「え、ち、違うわよ？」とかなるのだが…。

「「違います」「」

あれ？2人とも全く脈が無い。じゃあ何やってるんだ？まあいいや。今日は日曜日、同級生とは全く関係ない！

「そうですか、じゃあお邪魔しました」

俺は我ながら気持ち悪いほどの満面の笑みで、そう2人に告げて立ち去ろうとしたが。

「お、おいちよつと待とうな？」

と、肩を掴まれて止められた。

「何です？俺、今日は最高の休日を満喫中なんですけど？」

俺は再び満面の笑みでそう告げた。

「ちょ、ちよつと朝森君。勇橋君てこんなに明るかったっけ？」

「さ、さあ？俺もこれほど明るい勇橋は初めてですけど？」

朝森と日野先輩が軽く引いている。

さすがに自分でも気持ち悪いと分かっていたので、表情を真顔に戻す。

「…で？休日に男女2人が揃って行動しているのに、デートじゃないとしたら何なんです？」

「えーつと、情報収集？」

「何の？」

「……」

何だか2人でごにごによ話し始めた。

何か知らんが、仲よさそうだな。

と、2人の密談が終わった。

「えーつと、実は今日は勇橋を観察していたという…」

「却下。じゃあな」

俺、平均男児レベルの速度で本屋を駆け巡る。

「な、ちよつと待てよー！」

朝森が追いかけてくるので、俺は出口付近で『幻術スキル』《幻影分身》を対象を朝森に絞って発動する。

この技は、対象に自分の幻影を見せると、『幻術スキル』の初歩技だ。

「畜生！外に逃げやがった！美月先輩、行きますよー！」

「え、ちよつと!？」

朝森と日野先輩は店の人に迷惑なレベルの大声で会話した後、店の外へと走って行った。

「よし。本を買って帰るか」

俺は久々に本屋の棚を見て、3ヶ月くらいで結構本って出るんだなあ…とか感慨に浸ってから、本を数冊購入し、その後「ちよつと贅沢ちよつと贅沢」と言いながら、ファミリーストランに一人で入るといふ愚行をしてしまい、若干後悔。しかしめげずにスパゲッティを完食。そのまま帰宅。

そして本を読もうと鞆から本屋のビニール袋を取り出そうとしたがのだが…。

「ちよつと礫さん！今時間空いてますか？」

似非天使（白いブラウス？とジーパンVer）が部屋に突入してきた。

「ごめん。今とっても忙しいから後にしてくれませんか」

「分かりました。じゃあ急いでお連れします！」

いつもの事なのだが、似非天使はどうしてか俺の話を見無視する。

「休日くらい休ませろ！」

「労働者は休日も働くものなのです！」

そう言っつて似非天使は俺の両肩を抑えて

「転移」

と短く唱えた。

すると、辺りが一瞬真っ白になったかと思っつたら、次の瞬間、例の基地とやらに来ていた。

「……こんにちは」

「……こんにちは」

そしてそこには、私服姿の鈴先輩がいた。

服装は……ちょっと詳しくないのでよく分からないが、白地にピンクで柄がプリントされているTシャツに、水色チエックのYシャツらしきものを重ね着し、下はジーパンだった。

まあ、普通に可愛いと思う。

「はいはいお2人さん。とりあえず、クエストの設定も済んだので、さっさとこの『異世界旅行記1』に載っている3つめの世界『シルフィーナ』に行っつてきて下さい」

「今？」

「はい。今」

「……夏休みでも何でもなし、明日も学校なんだけど……」

そつだそつだ。異世界に行くなら、夏休み前くらいじゃないとダメだろ。

「ところがです。そこら辺もキツチリ考えてあります」
「ほうほう、そりゃどんな風に」

俺が聞いてみると、似非天使は『異世界旅行記1』の3章(?)
『円形大陸・シルフィーナ』を開いた。

「この異世界旅行記の最初のページにある地図が、入り口になっていると言いましたよね？それでその入り口には、『世界渡り』の魔法のほかに『時空魔法』と『運命魔法』が掛かっているんです。前者の効果は、この世界に誰かが入るとこちら側の世界の時間は止まり、中に入った人の肉体的な時間も止まります。それはこちらの世界に帰ってくるまで有効です。そして後者の効果は、この世界に入ったときに、空中に現れたり水中に現れたりしないように、辻褄が合うようにする魔法です」

なるほど。ご親切パツクだな。

「でもその『時空魔法』っていう世界全体に効果を発揮する魔法なんて、1人の人間に発動できるの？」

「はい。先ほどはそのような言い方をしましたが、原理的には『この世界に入った時間とこちらに帰ってくる時間を同じ時間にする』魔法ですから。実際は世界に対して魔法は発動してません。対称は個人です」

「…そうなんだ」

…。
なんでこの2人普通に会話できてるんだ？俺には全く理解できん

俺が話しに追いつけなくて冷や汗を流していると、似非天使が急に手を打ち鳴らした。

すると、例の鈴の音が聞こえた。

「とりあえず、クエスト画面を更新しました。それじゃあ、お2人も心の準備はよろしいですか？」

「いいわけ無いだろこの似非天使が！」

「…私は大丈夫」

「Nothing!!」

あ、英語の使い方間違えた気がする。

「それでは、お2人も同時に行かないと色々といけないので、異世界旅行記の魔方陣を巨大化して発動します。少し下がってください」

そうやって似非天使は『異世界旅行記1』を開き「巨大化、展開」と呟いた。

すると、『異世界旅行記1』を中心に3m程の白く輝く魔方陣が現れた。

魔方陣には不思議な文字がびっしりと書かれていて、内側真ん中外側で、それぞれ逆の方向に回転している。

「…結構綺麗なんだな」

「それはもちろん。私の主作ですから。…それでは準備いいですか？」

「…大丈夫」

「あーっと、ちょっと待った。どうやって帰ってくるか聞いて無いですか？」

「あ、そうでした。えーっと帰り方はいたって簡単。クエスト全てをクリアすると、クエスト画面にて『帰還魔方陣作動』のボタンが現れるようになってますから、2人で一緒に帰ってきてください」

「OK了解」

「じゃあ、お2人同時にどうぞ」

なんだかどきどきする。

『運命魔法』とやらで、空中に出たり水中に出たりは無いらしいけど、どんな所に出るんだろうか。一体『円形大陸・シルフィーナ』とはどんな所なんだろうか…。

「よし、じゃあ12の3の「ん」のタイミングで入る感じで」

「…微妙だけど大丈夫」

「まあ1と2秒の差は大丈夫ですから」

「OK…ってそういうえば、似非天使的には、俺たちはここに跳び込んだ後すぐに帰ってくる訳か」

「そういう事になりますね」

…んーなんか納得行かないけど、まあいいか。

「じゃあ、似非天使的には5秒くらいで帰ってくるけど、行ってきます」

「…同じく、行ってきます」

「はい、ではまた5秒後。」

「それじゃあ」

「「12の3!」「」

俺と鈴先輩は、魔方陣に飛び込んで

異世界へと旅立った。

15・休日は休みたいです。（後書き）

次回、『第2章：シルフィーナ編』スタートです。

そんな訳で感想・批判・誤字脱字があればお願いします！
ガチで読者の声が聞きたいです！

それから、気が向いたら評価もお願いします…。

16・魔方陣を抜けると、そこは異世界だった。by磯。

魔方陣に入ると、一瞬視界が真っ暗になったが、次の瞬間には当たり一面緑色の山の中になっていた。

…まあ、こういう人目に付かない所に降り立ってというのも想定内だ。

ひとまず動くのも面倒なので、鞆の中から念のため入れておいたノートを取り出して、画面を展開する。

『クエスト』

- ・『精霊剣の回収』
- ・『機械兵の討伐』
- ・『漆黒の魔導船の破壊』
- ・『空泳船の回収』
- ・『魔王城の破壊と魔王討伐』

以上全5件』

「……なぜ、魔王の討伐？この世界の奴らにやらせておけよ」

とりあえず、目的が多すぎる。ここはひとまず分担して……あ。

「そついえば鈴先輩は？別の所に出た？」

まあ、別の所に出たんなら出たで、ひとまず目的が絞られたのでよしとしよう。

1番最初の目的は、鈴先輩との合流！

「よし！そうと決まればまずは下山しよう！で、一番呆れている国の首都を目指そう！」

そうと決まればさっさと行動。

画面を閉じて…の前に、スキルスロットに魔法をセットしておく。

『魔法スキル系』は全13種で、『魔法スキル・火』『水』『風』『土』『雷』『光』『闇』『無』『治癒』『空間』『召喚』『強化』『魔方陣作成スキル』だ。

「だが普通に火やら水やらを鍛えるんじゃあ面白くない」

よって、俺は好きな色が白と黒なので『光』と『闇』それに戦闘中使えたら便利だろうなあ、とか考えて『治癒』を鍛える事にする。

「よしOK。えーっと『魔法スキル・光』のレベル1の技は…『光源』…効果・指先が光る。ふむふむ。『闇』のレベル1の技は『闇球』…効果・物理効果をもたらす魔力の塊を作る。あー意外と戦闘用だな。『治癒』の技は、まあ普通に『治癒』ってそのまんまかいな！」

込める魔力の量とかで変わってくるのかな？

「よし、じゃあとにかく習うより慣れる。『魔法スキル・光』『光源』…！」

と、俺は唱えるも、指先に何の変化もない…ってそうか。
俺魔力の込め方知らなかったわ。

「…今のは黒歴史。思い出すな、忘れる…」

よ、よし。下山！

改めて自分のいる所の周りを見渡す。

目に入ってくるのは、草と木と花と土と空。もう完全に自然だけだ。

「こうして見ると、異世界も地球の自然と同じなんだな…」

俺は故郷が田舎の村なので、こういった自然はむしろホームグラウンドだ。

そう考えると、鈴先輩は大丈夫なのかと不安に思うが、鈴先輩も《代弁者》という能力的に自然はホームグラウンドと言っても過言ではないので、別に心配は要らないか。と思いなおす。

「さーと。どーっここが都会つかない」

北か？南か？いや、東か西か？

そもそもどっちが北だ？今何時だ？

「や、やべえ。何ひとつ分からん」

俺が山の中でキョロキョロしていると、不意に耳元で鈴の音が聞こえた。

「ん？なんだ？」

もう大分聞き覚えがあるので、それが《RPG System》から聞こえたのは分かるので、再び画面を開いた。すると、『フレン

ド』のタブが点滅している。

「あ、そうだった。これで連絡取れるんだった」

『鈴：何処に出た？私、何だか勇者召喚の儀の所に出ちゃって勇者と思われた。』

あ…ははは、鈴先輩はテンプレに巻き込まれたか。

『礫：何処かの山に出来ました。じゃあひとまず俺がそっち目指すんで、そこ何ていう所ですか？』

『鈴：ケルベナ王国の城らしいよ、頑張ってるねー』

『礫：ところで、俺今何処にいるか分からないんですけど、どうしたらいいですかね？』

『鈴：思い切りジャンプして周りを見てみたら？』

『礫：なるほど。ではまた』

俺は画面を閉じてノートを鞆にしまいながら、足に力を込めて思い切りジャンプした。

「ぬおおおおー！」

俺は空中を飛んでいる間に周囲をぐるりと見渡すが、速度が速すぎてほとんど見えない。

が、一瞬家のような物がまとまって建っているのが見えた。

「よし！OK！」

安心したのも束の間、そこで上昇が止まり下降が始まってしまった。

もちろん、相当な距離を飛んだので、どんどん加速して物凄い速度で地面に着地…というか激突した。

激突した時に、相当な音と結構な振動をもたらしてしまい、周囲の木々から鳥たちが飛び立って行くのが見えた。やっぱり、クレーターを作ってしまった。

「……いや、町だか村だか知らんが、とりあえず見えたところに行ってみよう…」

俺は自分の作ったクレーターから、逃げるように立ち去ったのだ…。

で、先ほど見えた村に到着したのだが…

「おい貴様！何者だ！」

村の入り口らしき門の所で、門番に足止めを喰らった。

ちょっと警戒しすぎじゃね？とか思うのだが、真面目に答えることにする。

「え？…俺は勇橋礫っていう一介の学生でして…」

「学生？王都の学園からこんな所に来たっていつのか？」

王都の学園？丁度いいやそういうことにおこづ。

「まあ、そういうことなんです」

「何しに来た」

「…観光？」

「……」

すると門番さんは俺を怪しそうな目で睨んできた。

え？なんででしょうか。俺は嘘は言ってますよ？「冗談を言ってるんです。」

とりあえず、目でそう訴えかけてみた。

が、そんな訴えも届かず

「よし、お前ちよっと来い」

連行された。

16 魔方阵を抜けると、そこは異世界だった。by 礫。(後書き)

感想・批判・誤字脱字があればお願いします！

17・魔方陣を抜けると、そこは異世界だった。by鈴。

礫君の言った『12の3の「ん」』のタイミングで飛び込んだ私は、一瞬辺りが真っ暗になったのでドキリとしたが、次の瞬間には足が地面を捉えたのでひとまず安心した…のだが

「おお！成功した！！勇者様だ！！よくやった！ミフイーユ殿！」

「あ、ありがとうございます！」

…何なんだろう、この光景は…。

改めて足元を見ると、そこには、先ほど世界を渡るために飛び込んだ魔方陣のような物が書かれている。

目の前には黒いローブを来た、金髪の女性…！？耳が尖がっている！！エルフ！？

それから銀色のプレートメイルを装着した騎士が2名と白髭のおじいさん。

状況はよく分からないが、とりあえず異世界に来れたのは分かった。

すると、エルフラしき女性と喜び合っていた白髭のおじいさんが、私のほうに視線を向けて話しかけてきた。

「さて、勇者様。唐突にここに召喚されてしまって、混乱しているのも分かるが、ひとまず話を聞いてくれんか？」

い、いえ。別に混乱なんかしてないんですけど…？

「よし、ミフィーユ殿。ひとまず場所を移そう。勇者様、とりあえずこんな所で話すのもなんですから…そうだな、私の仕事場へ行こう」

「…分かりました」

そう言っておじいさんは部屋を出て行った。

それを見たエルフの女性が私のほうを振り向き、「勇者様、どうぞこちらへ」と手招きをして若干早足で部屋を出て行くので、私はそれを追いかけた。

なんだか勇者様勇者様って、召喚しただけなのになんで勇気があるって分かるんだろう？

あ、礫君はどうなったのかな？

ふと礫君の事を思い出し、『フレンド』画面で連絡を取ろうとしたが、私は礫君と違って鞆も何も持つてはいないので、周囲を見渡して四角いものを探す。

すると、キヨロキヨロする私を不思議がったのか、金髪のエルフの女性…ミルフィーユ？がこちらを向いて不思議そうな表情を浮かべている。

「あ、あの？どうしました？勇者様」

どうしようか。平たい四角の物はありますか？と聞いて大丈夫だろうか。

いやしかし、もし借りられたとしても、使っている所を見られたら変人に思われそうだ。

「……いえ、少し珍しいもので……」

「このお城がですか？」

「こっつてお城なんだ。」

「…それもそうなんです、私の住んでいた所はほとんどが木造建築だったので」

「そうなんですか…」

そう言っただけなのか、前方を見直して先ほどの白髭さんの距離が離れているのに気づき、「あわっ！」と焦ったような声を上げて、走り出した。

「…えっ！あ、ちょっと…」

いきなり走り出したので一瞬戸惑ったが、こんな広い城の中で取り残されたら十中八九道に迷ってしまう、と考えた私は、走って追いかける事にする。

「ティンガーさん！待ってくださいよー！」

数秒程度で追いついた私は、先ほどのミルフィーユさんが白髭さんを（ティンガーさんらしいけど白髭さんでいいや）追いかけているのを尻目に、四角いものを探す。

「…あ、あった」

見つけたのは、丁度通りかかった図書室…ではなく書庫だった。

「ティンガーさん！」

ミルフィーユさんと白髭さんはまだ見失うほどには離れていないので、この隙に、適当な本を借用してしまう事にする。

いくら赤の他人とはいえ、悪そうな人たちではなかったため、迷惑をかけないようにしなくては…。

そう考え、書庫に飛び込み、本棚に能力を使って呼びかける。

『本棚さん。魔法に関して書いてある本を教えてください…』

すると、本棚から言葉は返ってこないが、情報が伝わってくる。

『…ありがとう』

私は魔法の本の背表紙を適当に流し見し、明らかに初心者向けの本を一冊借用し、立ち去ろうとした時に目に入った明らかに怪しそうな『禁忌の魔法』という本が、隅っこで目立たないようでもオーラを発しているのを見つけ、それも借用。そしてダッシュ。

「ティンガーさん！」

未だにミルフィーユさんは白髭さんに追いついていなかった。

私はさっさとミルフィーユさんに追いつき、横から声をかける。

「…ミルフィーユさん、足遅いんですか？」

「…！…ミルフィーユ…ではなく…ミフィーユ…です。…私は…肉体労働は…専門じゃ…ないんですよ…」

運動が苦手なインテリ派なのか、言葉が途切れ途切れだが答えてくれた。

というか、何故白髭さんは走ってるんだらう？

不思議に思い白髭さんのほうを見るが、ちらりと見えた口が、笑っているのを確認し、理解した。

あ、礫君に連絡を取らなければ。

何だか見られたくないような気もしたので、走る速度を調節し…一体この城はどれほど広いのだろうか（ミルフィーユ）もうこの名前で決定）さんの後ろにつき、『初心者魔法の手ほどき』の裏表紙に画面を展開し、『フレンド』画面で礫君に呼びかける。走りながらなので、片手で四苦八苦し文字を打ち込み、送信。

『鈴：何処に出た？私、何だか勇者召喚の儀の所に出ちゃって勇者と思われた。』

すると20秒ほどで返事が届く。

『礫：何処かの山に出ました。じゃあひとまず俺がそっち目指すんで、そこ何ていう所ですか？』

…山か…どちらかと言えば、私のほうが運が良かったのだろうか。しかしまあ、ここは一体何処なのだろうか。

「…あの、ミルフィーユさん？ここって何処なんですか？」

「…ここは…ケルベナ…王国の…王城…です…」

「あ、ありがとうございます」

ミルフィーユさんの表情が、ゾンビのようになっていたので軽く引く。

「…あの…白ひg…ティンガーさん。ミルフィーユさんが死にそう

で見ているこっちも死にそうになるんで、からかつの止めてあげてください」

すると、さっきまでむきになって走っていたのが嘘のように、ゆっくり歩き出した。

「ははは、すまんの。もうからかつのが恒例のようになってしまっておるのでな…」

あ、返事返事。

『鈴：ケルベナ王国の城らしいよ、頑張ってるねー』

文章なので軽い口調で返す。

いつか実際にこんな口調で話せればいいな…。

するとまた20秒ほどで返事が届く。

礫君は今暇なのかな…？

『礫：ところで、俺今何処にいるか分からないんですけど、どうしたらいいですかね？』

なるほど。

『鈴：思い切りジャンプして周りを見てみたら？』

『礫：なるほど。ではまた』

返事を返そうとしたが、これに返事を返したら一向に終わらなくなってしまうので『フレンド』画面を閉じ、例の『禁忌の魔法』を『アイテム』画面に放り込み、『アイテム』画面からいつぞやのオ

リハルコンを取り出した。

このオリハルコンは、大分前にクエストで手に入れたもので、すでに『代弁者』によるコミュニケーションで仲良くはなっており、私の思うように形を変えてくれる。

『オリ君、こんにちは。形を変えてくれる？』

『はい。了解です』

オリハルコンはその金延べ棒のような形をウネウネさせて、私の思い描いたままの形　　タバコの箱のようなものに形を変えた。

「画面を展開できるような形で、ポケットに入るような形を考えると、タバコの箱が丁度良かったのだ。」

私はオリハルコンが形を変えたのを確認して、左手の本に展開している画面を閉じ、オリハルコンに画面を展開。そしてそちらの画面で『アイテム』画面を開き、本を閉まった。

そうしていると、白髭さんが歩くのを止めたので、私は電光石火の早業(?)で画面を閉じてオリハルコンをポケットにしまった。

「さて着きましたぞ。ここが私の部屋：もとい、研究室です」

そう言って、白髭さんは扉を開いた。

17・魔方陣を抜けると、そこは異世界だった。by鈴。(後書き)

この第2章から色々新しい事に挑戦してみようと思います。

一つ目がこれ、別の登場人物目線です。

以後も、シリアスに挑戦してみたり恋愛に挑戦してみたりします。

感想・批判・誤字脱字があればお願いします！

それから、評価してくださった方、ありがとうございます！

18・我輩は異世界人である。信用はまだ無い。

まあ、あれだ。結果から述べよう。

牢屋に入れられた。

何だかんだで信用されなかった…。

というか、学校の教室ほどある牢屋に俺しかいないってのはどう
いうこった？

「なあ、衛兵さん。何で俺は牢屋に入れられなきゃなんないんだ？」
「…お前さんが怪しすぎるからじゃないのか？」

「…まあ、確かに髪・目・眼鏡・服・ズボン・靴・鞆まですべてが
黒いからなあ。」

「だけど、言っちゃあ悪いが、こんな辺鄙な村でそんなに警戒する
事も無いんじゃないか？」

「…確かにそうなんだがな…、坊主。名前はなんていうんだ？」
「…？勇橋礫だ」

「ハヤバシレキ？変わった名前だな…俺はジーンだ」

牢の前に立っている衛兵は、こちらを振り向きそう名乗った。
ブロンドの髪に青みがかった目、そこら辺は若干似非天使に似て
いる。

ありや、意外とハンサムだ。この男児の敵め…！

「ジーン…ああ、そうになると俺は礫ですね。勇橋は家名です」

「なるほど。じゃあレキ。早速聞きたいんだが、お前は門番とどう
いう問答を交わした？」

あれ？口調が何だか優しくなったぞ？
こいつとは仲良くやっていけそうだ…。

「えーと…？『お前は何者だ』『一介の学生です』『学生がこんな
所に何しに来た？』『旅行？』大体まとめるとこれだけで俺は牢に
入れられましたね」

理不尽だ…。

すると、ジーンはなるほど。といった表情でぼんつと手を打った。

「そりゃそうだ。今この村はなあ、色々事情があつて厳戒態勢なん
だ。そこに黒ずくめで学生と名乗っておきながら「旅行中」だなん
てほざく怪しい奴は捕らえるに決まつてるな」

「…事情つて？なんですか？」

そこが重要だ。

こんな辺鄙な村でいつまでも捕まつてるわけにもいかない。
さつさとその事情とやらを片付けて、変な疑惑を打ち払って鈴先
輩と落ち合わなければ…。

「…まあ、お前も害のある奴じゃ無さそうだしな…」

俺の事なので嬉しく思うのけども…そんなに甘くていいのかジーン！

「実はな…お前はこの村を辺鄙な村と評したが…まあ、それも間違
いじゃない。だが、この村には唯一と言つていいが、とてつもなく

価値がある財が保管されていてな？」

「ほうほう。こんな辺鄙な村にそんな物が？国に保管させたほうが良いのでは？」

「…それは俺も思っている事なんだが、親父が…じゃなくて村長がな『これが無くなれば、こんな村はすぐに滅んでしまう！』とか言っつてな。確かにそれもそうだと思いい村に保管してるんだ…」

ジーンさんはとうとう地面に腰を下ろし、俺と向き合うように話し始めた。

オイオイ、職務をまっとうしたまえよジーン。

「滅んでしまう?」

「ああ、その財は地の精霊の加護が存分にかけられたナイフだ。この村はその加護を利用し、田畑を潤してきた」

なるほど、地の精霊か…。

「で？事情つてのは？」

「その事なんだが、実はこの頃村を襲う山賊が増えていてなあ…段々と手口も巧妙になってきているんだ」

「例えば？」

「前々回は、山賊に襲われた冒険者のグループのふりをしていたんで治療のために村長の家に入れたんだが、入れてやったとたんに暴れだしたんで1発入れてやった。前回は王都の賢者だと偽って潜り込んできたが、さすがにその時はすぐに分かったんで、ボッコボコにした」

…意外とこのジーンて奴は強いのか？

ジーンて名前からして、MSに初めてのつた天パーの機械オタクにやられそうなジーンの兵士みたいなのになあ…。あ、元ネタガン

ムね。

「で、俺が疑われたと…」

「そういう事だ。だがまあ、お前はナイフの事も知らんらしいし、俺からも村長に言っておくよ」

「さすがジーン。分かってくれるって信じてたぜ！」

「さっき初めて話した相手だろうが！」

「この世界でもボケとツツコミはあるのか…？」

「で？本当はお前は何者なんだ？何しに来た？この村に」

「あー、何と言いましようか…」。

「まず言おう。俺は学生じゃない」

「初っ端から嘘だったのか…」

「そして理解してくれ。俺は本当に道に迷ったんだ」

「…はあ」

「んでもって最後、俺は…えーつと…ケ、ケロ？ケル？なんとか王国の城を目指してるんだ」

「…なるほど。たぶんそのケルなんとかってのは、ケルベナ王国の事だろう」

「ああ、それだそれ。」

「大抵の異世界の人名とか地名は面倒すぎて困る。」

「それでだジーン。それを踏まえて聞きたいんだが…」

「ん？何だ？」

「…ここが何処でケルベナ王国の城が何処なのか教えてくれないか？」

「……ここが何処かだけじゃなく、目的地すら分かってないのか？ お前は」

「…弁解のしようが無い。頼む。できれば地図を見ながら教わりたいんだが…」

ケルベナ王国を目指したいのもあるが、なぜこの世界を『異世界旅行記』は『円形世界シルフィーナ』と称したのかが気になる。

まあ、単なる好奇心だ。

「分かった。少し待っている」

「さすがジーン話分かる方でいらっしやる」

「はいはい」

そう軽くあしらって、ジーンは俺の入っている牢の真正面にある階段を上っていった。

にしてもあの野郎…人がせつかくボケたつてのに…。

ってあれ？自分で言うのもなんだが、俺テンション高くないか？

「…異世界に来たせいかな？」

ふう…じゃあテンションのせいで異世界人だって言わないよう、本でも読んでようかな…。

何と、あの門番達は、俺の事を牢に入れておいて、鞆も何も没収しなかったのだ！

まあ、俺の懐中時計を回収しようとしてたら、人間だったのか分からなくなるくらいにボッコボコにしてやるけどな！

とか一人で息巻いていると、ジーンが上つていった階段の所から微かにだが、悲鳴が聞こえた…気がする。しかも、かすかに赤い光がチラチラ見える。

「お、おい…これってやばいんじゃない？」

俺の勘がピンチを伝えるので、力を使って牢の鉄格子を曲げようとしていると、ジーンが慌てて降りてきて、

「おいっ、レキ！上がやばい事に…って何やってんだ？お前」

「えーっと、上がやばそうなんで…脱出？」

「…ま、まあ、その判断は間違っちゃいけないけどよ？さすがに素手じゃ無理あるだろ」

…いや、お前に目撃されなきゃ開けてたよ！

「…じゃあ早く開けてくれ！俺も加勢する！」

「わ、分かった…間違えても相手に加勢するなよ？」

「はははOKOK」

「？おーけー？」

そう言いながらもジーンは牢を開けてくれた。

「よし！じゃあ、山賊ぶっ飛ばすか！」

ついでに恩売つとくか！

なんて下心なんて無いからな！勘違いするなよ！

18・我輩は異世界人である。信用はまだ無い。
(後書き)

感想・批判・誤字脱字があればお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0356ba/>

現実的なRPG。

2012年1月6日20時19分発行